

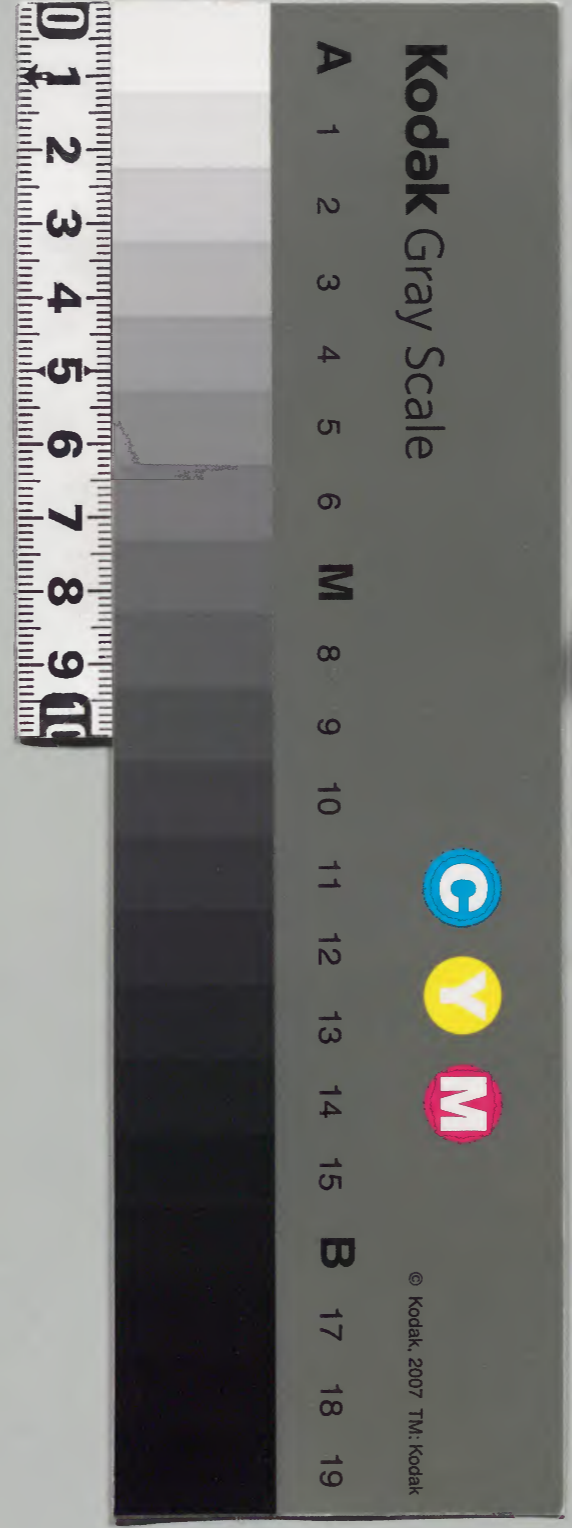
日本書紀傳三十卷_{十九}

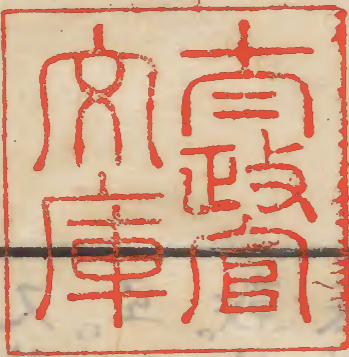
和書
一〇五二號

百二十五

内閣文庫	
番號	和 10522
冊數	156 (130)
函號	特85 1

内二六八三編



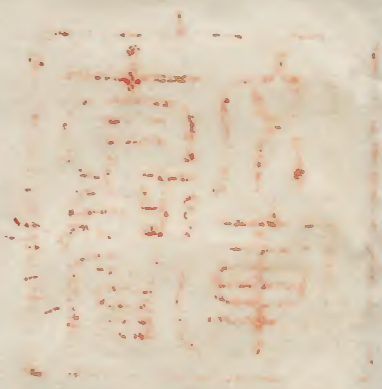


多理登美命高知彦命午長怒命若浪命玉照彦命と有
 て沼河比賣命の生坐り御子十一柱神の名を載たり
 又別よ御子建沼川男命三穂須美命此神於恒踏
 波之穂而釣魚賜也故号三穂須美命也有て其建
 沼川男命と云を長子と爲り然れども地神本紀は次
 娶高志沼河姫生一男兒建御名方神と有て此女神の
 生略へるが如く一柱の御名も其神名の見えざるは
 右子注るが如く御穂須美命と云はるが故も
 有べけしと主踏波之穂而釣魚賜也と云はるが故も
 臨章は事代主神遊行在於出雲国三穂之碕以釣魚爲
 樂と有る混は爲る後人の説と思はる可く由は玉照
 者るる自餘り九神共の更考ふ可き由は玉照神と
 玉照日子命と云は筑後国神名帳に種乎玉照神と
 申す見えたりと云は其心同神ありと如何一定めし
 然れは其三穂須美命を建御名方神と同神と爲て
 自余の十神ハ正史實録ハ更あり諸国の風土記あると
 よも一として此れと思合す可き事無けは皆事
 り疑ふ可し然れども神名を若くは古風土
 記の逸文有て傳はるる猶能正す可し

○日本書紀傳三十

○九百五十九

内一二六八三號



又其神之嫡后須執理毘賣命甚為嫉妬故其日子遲神和備
豆。^{三字}自出雲將上坐倭國而東裝之時片御午者繫御馬之
鞞片御足踏入其御籠而歌曰奴婆多麻能久路岐美祁斯遠
麻都夫佐尔登理與曾比流岐都登理牟那美流登岐波多多
藝母許礼婆布佐波受幣都那美曾迹奴岐宇豆蘓迹栢理能
阿遠岐美祁斯遠麻都夫佐迹登理與曾比流岐都登理牟那
美流登岐波多多藝母許母布佐波受幣都那美曾迹奴棄宇
豆夜麻賀多尔麻岐斯阿多泥都紀曾米紀賀斯流迹斯米許
呂母遠麻都夫佐迹登理與曾比流岐都登理牟那美流登岐
波多多藝母許斯與呂志伊刀古夜能伊毛能美許等牟良登

理能和賀牟礼伊那婆比氣登理能和賀比氣伊那婆那迦士
登波那波伊布登母夜麻登能比登世登須須岐宇那加夫斯
那賀那加佐麻久阿佐阿米能疑理迹多牟叙和加久佐
能都麻能美許登許登能加多理基登母許遠婆

又其神之云々記傳より又一の故事あり其神
こゝ上段の首より此ハ千矛神と有と承て云々と云れ
たゝか如く即次より須執理毘賣命の御答歌より夜知
富許能加微能美許登夜阿賀流富久迹奴斯許曾波と
有て其終より如此歌即為宇伎由比而宇那賀氣理而至
今鎮坐也此謂之神語也と有と見ゆべ己よ大田主神

と稱奉る時の御事ありけり此ハ甚ク後の事と所
見たリ歟此ハ少彦名神の常世郷ニ渡リ御在
坐一後ノ天下ノ主張ハ大國主神と稱奉ル程あり
しと思ゆる（自出雲將上至倭國と云ふ文見え又）此御歌の中ニ夜麻登能と云ふ御句有
其國号の事ハ己ノ傳六七十九百一ニ
注ルカ如ク大和風土記ハ山跡國者往昔山岳多而平
地少所治天下大穴持命與少彦名命巡行此國數山開
谷為平夷故云山岳也と見えたり其國号の出来リ
後の事ありを以思ふ又其神と有ハ唯同神と云程
の事とて其己き時ニ專稱奉ルハ千矛神と聞え奉

り一頃此ハ屆りて見べりさるあり○嫡后ハ記
傳ニ意富岐佐岐と訓へ一上ノ嫡妻と有ハ御父神の
御言あり故あり中神名式ハ出雲國出雲郡杵築大社
名神の次ハ同社大神太后神社と有ハ即此須世理毘
賣命を祭ルりよて太后と申セる事決下注され
たり猶后と申す事の委上由ハ上百ト下ト己ノ説
置り○甚為嫉妬ハ記傳ハ伊多久宇那理泥多美志賜
此伎と訓へ一書紀舒明天皇御卷ハ嫉妬と宇
波那理泥多美志豆と有ハ依り此高津宮段ハ其
太后石之日賣命甚多嫉妬故天皇所使之妾者不得臨

官中言之者足世河賀迦迹嫉妬と有り 偕此ハ必一也
 上の沼河北賣のこよハ係て見べくす彼とハ別段
 あるハ九てめ上を云ふり彼ハ上北賣の此嫡后と畏
 して 稻羽ノ歸りし事をも思ふ可一と有り其宇波
 那理ハ白持原宮段大御歌ノ見元たるを記傳十九ニ
 下ノ宇波那理賀ハ後妻之あり 和名抄ノ後妻和名宇
 波奈利と見え同書ノ前夫之太字後夫宇波字とも有
 此ハ宇波ハ後ノ意あり可一凡そノ事ノ前を、下云
 こと云ひ後を上云こと云頼多ノ字鏡ハ嫌宇波奈
 利と有り嫌字心得ず大和物語ハも此後妻前妻一日

一夜万事を云語りいて且めて 船ノ乗ぬ檜垣家集ノ
 船ノ乗せあど爲る程ノ胃も来たり此後妻前妻一日
 一夜万事を云語りいて且めて 船ノ乗ぬと有り又書
 紀ノ嫉妬を訓り此ハ本妻の後妻を嫉むを云あり 補
 意注さとなりよて明けけ此淫多字ノ義ハ傳廿二
 二十ノ云り 又俗ノ媼歐ニ書て宇波那理字知こ有て
 二下 右と目ト訓例あり淫多字ハ嫉をこ妬
 見え楚辞注ノ害賢曰嫉害色曰妬と有て字鏡集ハ
 嫉と字良夜字又宇良字又曾淫字又尔久字と訓り妬
 とも宇良夜字と訓り他ノ上を見て心ノ病を云ふ
 偕嫉妬ノ義と説く時ハ右ノ如くあるも此ハ唯
 尋常ノ上ノ引競へて思成ト奉る可きハ非ず必所由

有る御事、こゝろハ御在坐べり、めも其ハ次あり、嫡
后の御歌、阿波母與賣、近斯阿礼婆那遠岐、豆遠波那
志那遠岐、豆都麻被那斯と詠て給へるが如く、限無く
睦じ聞えさせ給へる餘、日子邊神の祀、物為させ
給へるを、限無く可惜し、聞えさせ給へるが故、自
然ノ嫉妬、こゝも云状、似通ハて給へる事、こゝろ御在
坐たりけり、一旦此須勢理毘賣命の御事、他の後
等の例、こゝ甚く別ある事、御在坐て己ノ傳、十四
下ノ注、るが如く、其始、大國主神の八十神の爲、十四
と注させ給ひて、御父大神の御許、御在坐ける時

よ亦其御許、よて甚く辛苦め、試みさせ給ひて、果、ハ
打も殺させ給ふ許の御事、ありけるを、悉くよ救ひ聞え
させ給ひて、其御靈を蒙ふらせ給ふ事、多く御在坐
ハ然る物も、て其還り御在坐よ、及びて、意礼、爲大國
主神、亦爲宇都志、國玉神、而其我之、女須世理、毘賣、爲嫡
妻、この御命を蒙坐らも、己命の大國主神、に任させ、
せ給へるよハ、非ず女神、に共よ、治めさせ奉り、め給
へる證ハ、傳、十八十九二十ノ注、るが如く、道主貴と称奉ら
御名御在坐を、以て、著明き御事、ありけるが、后神の
御威勢、將相並いて、尊く御在坐けるありけり、其終

小政其八上比賣者雖率來其媼后須世理毘賣而其
所生子者刺狹木俣而返こ有る此一車を以ても其余
を推量ゆ奉る可き者み多む故此の御歌も其御車
を伊弉古夜能伊毛能美許等又こ和加久佐能都麻能
美許登ふども甚く尊び聞えさせ給ふ程の御事あり
けしハ上車を得させ給はずして別よ妃を娶らせ給
ふのみ甚く憚り奉らせ給へりありけり且始より大
神よ物あるを教へ聞えさせ給へり御事より始て萬
の後方の御政を相並びて治させ給へば即其畏
よりをも置せ給はずして直に知らせ奉らせ給ひけ

いり外も當べき言の毎も任も甚く嫉妬の字を書
るより甚く其義を損へる者り此末は如^次此歌即^次爲宇
伎由比而宇那賀氣理王至今鎮坐也の文を以て其美
好ハ^次き御中間の程を想像り奉る可き御事あり
此ハ出雲國の御在り坐ける程も在り故事あり
て沼河比賣命の時係り可き事ありすと雖も
其時よも夫神を諫め聞えさせ給ふ車の御在り坐け
るあり可^次其ハ上ハ十七下も引^次能登國氣多神
社の社説よ十一月甲巳日^次鶏祭あり^次鶏浦村より^次鶏
を捕り午日清夜して巳刻^次神前よ放つ其鶏本社^次の
を^次上り^次懼の前よ^次羽叩いて^次跳く所を捕へて海に放
つ此^次竊越後國中^次山神社能生權現の磯よ^次坐る時^次彼
社の祭禮あり^次傳云北島の女神此^次鷄浦の磯へ^次寄給ひ
一官神と夫婦と成給ひし^次御中^次喜ハ^次借こ住給ふよ
と^次越後の能生へ^次飛給ひて^次或社地を^次借こ住給ふよ
因^次り^次と云る氣多神ハ^次大己貴神^次と渡らせ給へよ

御座座を所四五町
行て東方より有り取
てを難

其北島神と申すハ諸ゆる宗像神子御在十生けしハ
上九百四十五丁ハ注々如く沼河比賣命の御子生坐
一時の産屋を其国は建させ給へりし時あり此婦
后の能生浦ハ飛核給へり事の有けしと石の如く傳
たれり者あり今も能生の辨天とて神とく之て給
へりもてと空けたる事ハ非トクハ若て神名式ハ
其越後田三島郡ハ鷓川神社と申す有を式内神社業
内ニ云物ハ米山の東黒姫山富号黒姫大明神山上迄
凡二里許社頭辰方ハ向ふ古の社地ハ其ノ二町許
登々四趾有り其ノ南西方十四五町行て鷓川麓と
云ふ是ハ流流出故ハ鷓川と云々山上ハ
多々山の中腹ハ舟入の窟有り其ノ内ハ茂方遙の山
の尾崎田涯ハ舟通と云有ハ芝山の草色一
入青く道の如ク近き所ハ見えず是ハ往古明神
御舟よて臨幸ハ時鷓鳥御舟を引登りし通あり云
ふ晴天夕陽ハ見回山の中腹ハ寅寅方ハ帆柱石有り云
くと有ハ由有て思ハ其ハ上ハ十八丁ハ注々ガ如ク
富郡御島石部神社ハ大己貴神多岐神社ハ湍津姫命
三島神社ハ事代主神ハ生み合り又能登国名勝志
珠洲郡三社ハ上野ハ在り下ハ窹よて官殿樓閣

子子子子子

有て一の仙境ありと云ハ祭神猿田彦命又鷓川村ハ
磯ハ寄地と云有リ昔鷓川の天神の神休葉付の大根
俵藻ハ乗て寄給ふ地あり云々此鷓川村又三
船社共ハ右の鷓川神社と由有ハあり事共あり又神
名式ハ謂ハ越中國婦負郡鷓坂神社坐り伊賀国山
田郡鳥坂神社ハ伊水温故ハ祭神下照姫命也云々
然るを三代實録ハ鷓坂比咩神鷓坂妻比咩神と有
て二柱の趣あり右ハ如クハ比咩神ハ下照姫命
よハ妻比咩神ハ其御祖神○日子還神ハ記傳ハ夫
よて此と同日別あり云々
妻の上の車と云時ハ其夫を指て云祢と聞ゆ下ハ豊
玉毘賣命の御歌の御答歌を擧めて其御夫火遠理命
の御事とも如此申せり略中今世の賤者の言ハ夫を意
夜還と云て同意あり可ハと有ハ如ハ彼字麻志阿斯
訶備比古還神を此神世七代章第三一書ハ可美葦牙

合官見_示幸_行本
美野_到給_天官
遠_見他_野比_天其_氣
乎_和比_野止_氣之_と
見え

彦舅尊_の作りて彦舅此云_比古尼_と注さ_られたるも此
古神の謂ふ_か其_よ邊の尊祚を添たり_し者_もて此
と_同言_ふる_か其_よハ女神の對御在_し坐_さざるを以思
ふ_よ神号_の夫婦相並坐_るを其_比古命_其比賣命_と甲
し_ハ神祭詞_の比古神_云比賣神_云と有_を見
し_ハ然_甲せ_る尋常_{ある}よ_て殊_の日子_邊と_申せる
ハ敬の限_{あり}と_所見_{たり}○和備_且ハ記傳_と續紀_の
光仁天皇の藤原永_乎大臣を悼_給へ_る詔_の言_年須部
母_並為_年須部_母不知_年悔_備賜_比和備_賜比_大坐_坐止
詔_と有_り又_万葉_四_三十_十物思_跡和備_居時_二又_三十_十

絶常云_者和備_深賣_跡又_今者_吾羽_和備_曾四_二結_類又
三_十大夫_之思_和備_年又_五十_念絶_和備_西物_尾又_五十_四
九_十遠_有者_和備_鳴為_成十_一二_十里_遠意_和備_不家_里十
二_三十_よ我_故尔_痛勿_和備_曾又_三十_國遠_見念_勿和_備
曾_風之_共雲_之行_如言_者將_通る_と有_り為_し方_並々_差
迫_りた_る意_{あり}取_と有_り猶_續後_紀集_和十_二年_尾張
連_濱主_歌の_於岐_那度_天和_飛夜_波遠_良並_久左_母支_毛
散_可由_流登_岐尔_伊天_五萬_毗天_年と_有る_も通_考ふ_可
一_右義_抄の_位を_も任_るも_和備_志伊_又和_夫又_登呂
布_と訓_{した}た_る文_選の_憐慥_を和_備志_と訓_{した}る_を注
し_傷思_貞と_有り_又別_よ和_備人_と訓_し事_歌詞_の多_く
見_えた_るハ_常の_負し_き人_を云_り其_も右_と同_しく_為

し方無く差迫りたり（意あり） ○自出雲に當昔大國主神爾勢理毘賣命二柱神の夫婦相偶し御在し坐ける（宮） 官都（即宇迦山本宮） して出雲國ありけし其より打立し御在し坐しと為させ給へりあり此よて右（九百六十） 注しが如く沼河比賣命を婚つせ給へり頃よりハ甚く世隔りて後あり事を和べし其令産給へり建御名方神の事ハ傳（百七十） 引り信濃凡土記ハ信濃國者往昔建御名方神等之所往之地也洛天下御神大己貴命又火彦名命建御名方命巡行此國云々云文有て己よ大己貴命火彦名命と相共れ國巡り為給へるを

以ても其御祖沼河比賣命を娶らせ給へるハ彼八千矛神と聞えさせし程の甚己き時の御事あるを今度ありよ自出雲將上坐倭國の文有る其ハ後ハ傳へたる事とも為べけしども正しく御歌ハ夜麻登能と有る上ハ（其倭云云） 國号のこは定めて其火彦名神の常世郷ハ倭とせ御在し坐ける後ハ尊大國主神と稱奉りし御時あり事石ハ注ると以て曉ら可き者ありり ○將上坐倭國ハ記傳ハ國ハ（サナ） 多（ナ） 在らば遠き倭國ハ行坐しと為給へるハ倭ハ當昔より既に他國ハ殊あり由縁有けしハ後遂ハ和御魂を其國の大御和山ハ鎮坐て賜ふとも思合す

海官遊行書卷六
書は公珥我書
是書多轉給白所利
計理と有る御歌
回るとたす訓なり
なり

可く上とハ鄙より京へ行を云ふと此ハ皇都ト爲
ての後の言を以語傳たふありと有か如く但傳廿九
百八十上三百五十八下ト注せらる如く大己貴神
五下四百二十二下
の神都ハ一ト出雲国ある然る物よて其幸魂奇魂
神を一ト齋奉るを給へるト初めて其大和国を玉
檣内国として其国ト御在ト坐ける狀ありけしハ不
意く出坐りよハ非ずして其幸行す可き處の有て御
在ト坐しと爲させ給へる御事トあり有ける○東裝
立時を記傳ト與曾比志立須時ト訓とたり與曾北
ハ此御歌ト登理與曾比ト云事三處出たり是あり即
林都夫佐子

宝鏡開始章第三一書ト乃躬裝武備ト有る裝字を訓
る事傳廿二十三下ト注り記傳ト東裝の字ハ神功皇
后元年御卷一云ト皇后爲男東裝征新羅ト有り又御
天降段ト將降裝束之間朝倉官段ト亦其裝束之狀又
書紀雄略天皇御卷ト裝束已畢進軍門云ト万葉二
五ト皇子之御門ト神官ト裝束奉而三ト五ト白細ト
舍人裝束而和豆香山御與立之而十二ト三トト夢見而
衣手取服装束間ト見ゆ又十四ト九トト水都等利
乃多ト武與曾比ト二十ト十七トト奈ト波都ト余曾比ト
曾比氏氣布能比夜伊田豆麻可良武又三十ト等里與曾

比門出字須禮婆ふど有之依り三ハ發出給ふ有
補之書ささたり 即立ハ發出給ふ由あり車ハ右ノ引
意 其ノ伊田豆麻 可良武又ハ等里
與曾比門出字須禮婆ふど有之是 當り又
名義抄ハ裝字與曾比とも與曾富比とも見ゆ ○片御
手云ハ御足 記傳ハ御馬ノ乗むと爲給ふ状ありと有り
○御馬ハ記傳ハ美麻ノ訓ヘ一ノ葉五二十ハ美麻知
可豆加婆 之有リ御馬近者ありと有ハ如一馬ノ説ハ
傳十四 百三十十 九三十十 注リ ○鞍ハ記傳ハ和
名抄ハ久良 之有リ雄略天皇十三年御紀歌ハ農播夜干
抱磨能柯彼能矩盧古磨矩羅枳制播 之訓ハ云々
方ハ知一久良ハ即座 義あり ○御鏡和名抄ハ蔭筋

切韻云鏡兩邊兼脚具也和名阿布美之有リ名義ハ足
踏あり万葉十七 四十十 可波能和多理瀬安夫美都知加
須毛ト有リト云云々 ○奴婆多麻能上九百四 注リ
○久路伎美祁斯遠ハ黒御衣とあり美祁斯ハ此ノ三
所出たり記傳ハ推古天皇十一年御紀ハ衣裳ヲ美祁
斯ト訓万葉十三 下足玉世千珠毛由良ハ織族旗 子
公之御衣ハ織將堪可聞十四 三ノ筑波祢乃尔比具波
麻欲能伎奴波安礼栴伎美我美家思志安夜尔伎保思
母あり有リ此ハ大刀ハ佩物あり故ハ御佩ト云ハ
ハ執物あり故ハ御執ト云ハ如ク衣ハ著物あり故ハ

御著と云ふる著を古言よ祈流と云り日代官段倭建
命御歌よ祈世流と見ゆ補と云きたり猶伊勢物語よ
も是や此天の羽衣諾しと君が御衣と奉りけしと
所見たり又其ハ卷九下よ祈世流ハ著有るり祈世
意有り其ハ先著而有と古言よ祈流と云ふ万葉十五
卷よ和我多妣波比左思久安良思詩能安我家流伊毛
我詩呂母能阿可都久見礼婆又此の御答歌有り和賀
祈勢流も熱田縁起よ和何祈流と有り偕其祈流を
立有と多勢流行有と由加勢流と云格よ祈勢流
とハ云るり万葉四卷十七下よ吾背子之蓋世流衣
之と有り御衣を美祈斯と又記傳よ黒衣服ハ喪服よ
云も同ト活用するりと有り
て昔ハ常よ服ハ事ありハ此よ如此有ハ如何と
云よ先喪葬令よ凡天皇云こ服錫紵義解よ錫紵者細

布即用浅墨深也と見え常よ歌も墨深衣と詠と又
中昔の書共よ是を鈍色ニイロと云ふ此ハ今云ふ鼠色よて
眞黒るるよハ非ず其申中よ深浅マ差異ハ有るり偕吉
部秘削抄よ鼠色鈍色と云て分てり事も有と今云
鼠色ハ種と有ルバ古鈍色と云一物其中よ在り鈍色
ハ移花ヤウシナよて深ミ云ハ墨深ハ餘り見苦ク色イロあり故
よ火白有せしとて後よ青アヲをク加へたる者あり故青
鈍ニイロと云名も有り又青花よ墨を入て深とも云るも
同ト此等ハ後の事よ一本ハ唯墨深るり服假問事と
云物よ著服者可用鼠色其色或墨許深之或墨入移花

云云又持統天皇御紀七年正月記云天下百姓服
黄衣色奴皂衣ハクリンノコロモと見え衣服令よ家人奴婢ツルミスミンソノ操墨衣と定
じたるも右の鼠色ある可し此等ハ良後の御制る色
ども上代より右の色ハ賤しめ惡きたる可し楮真
黒あるハ貴人も常よ著たうとも云べけと上代
より中昔迄も黒衣を著たる事物は見えハ中昔の
衣服の事を云所よ黒き由云事ハ任見えたるも其
ハ佗の色の黒とて見ゆる事あり實ハ黒色あるよハ
非ず源氏若菜下巻よ白も無く黒き袍ハと有る類ふ
り當昔黒袍ハ益ハ此も紫色の甚黒とたるを如此
云彼鈍色ハ非て眞黒あるをも人の賤しめて好ざ
りしと見えたり四位より上紫袍を改メめて黒色ハ爲

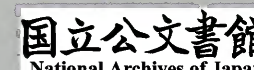
しるハ甚後の事なり若て今世人の黒色衣をしも好
しハ黒袍を尚ハより移り人情なり然と
バ今此ハ黒御衣とて有ハ是ハ不フツ宜とて棄る事を云
む爲ハ先殊更よ好しハぬ色を詠給へるなり楮
次よ青御衣を云て其をも棄其次よ緋色を云て此不
宜ハきと詠給へる次第自然後の御世ハこの服色の
御制の次第とも合るをや衣服色の御制の次第ハ大
抵西蕃の隋唐の制ハ擬へる者なれども上代よりも
自然入の尚よ好む色ハ卑しめ惡む色ハこの次第ハ然
有て此ハ彼方も似たりけむ又彼国の古よ代ハ各

傳十四卷... 今傳崇峻元白... 紀又物部大連... 有... 一乃... 今令... 和... 青... 事...

尚い色有... 強て定め... 事あるが其ハ中...

云々足... 其ハ倭姫命世記... 曰馬乘男形著紫御衣... 一も紫御衣を著させ給へる... 又傳廿七卷... 素戔嗚尊の曾戸... 御在... 帳の中... 有ハ此神天上... 眠る... 見尊と素戔嗚尊... 位淺標衣並皂縵頭中... 有りて... 縵頭中云々... 實也... 椽衣の車ハ万葉...

記傳ハ眞具あり都夫佐... 云云... 給へる由あり... 奉... 上古... 不此御歌の趣... 記傳ハ取装あり... 等里與曾比門出子須礼婆... 有と其義等... 津鳥あり海宮遊行章算...



鄧利軒茂豆向志磨尔ニ見元六十四ノ奥鳥味經乃
 原尔十六二十ノ奥鳥鴨云船之又奥鳥鴨云舟者ふと
 有を記傳ノ奥鳥ハ海川ニ在と池ふとノ在と木上ノ
 浮居鳥云云鳥ノ事あり奥ノ邊ノ對ヘル名ノ
 陸より放とる處を云ふと云とたるが如くよ其
 同ノ意よて其十一四十ノ奥尔住鴨之浮宿之安雲無
 十四二十ノ於吉都麻可母能奈氣伎曾安我須流又十
八於吉尔須毛乎加母乃母己呂也左可利伊伎豆久
 伊毛乎於伎氏伎努可母ふと所見たり但奥津鳥云
ハ必しも邊津鳥云云も有ぬ可き事あるよ古今の書
ノ見當くさるハ彼浦渚鳥とも渚鳥とも云るヤ此よ

ハ叶ふ可り但奥津鳥ハ石の如く鴨を本として
 味鴨真鴨小鴨又ハ鶺鴒鴛鴦鶴ふと云い邊津鳥ハ
 當り渚鳥ハ千鳥鴻雁鶴鷺ふと云い如く
 常ハ水涯ノ棲て天雲翔るを云ふあり○牟那美流
 登伎ハ記傳ノ胸見時り木鳥ハ鷗を延居て己ハ胸
 を見ろ如くノ為る物るよ譬へと云るり師説を
 りと有り今按ふよ水鳥の潛入る時の形容よて祝詞
 ノ鶺事物頸根突後氏と有る其頸根衝くるども胸見
 々と云状ノ似たる可一○婆多ニ藝母ハ記傳ノ鱈揚
 もる中昔の物語書るども袖之波多又波多袖るども
 有て袖の端つ方を云り魚の鱈ハ背上鬣也と注一に
 まども波多と云名ハ左右の比礼を本めて云る可

今人皆云今世長
多氣婆奴之四
五也其言下而
有之其言永通
之氣概上之通
極上傍島之行大
荒山下傍出八
氣

一又俗ノ物の邊側を波多と云も同意なり多藝ハ刀

葉二十六多氣婆奴礼多香根者長寸妹之髮九三十

ト小放多氣婆奴礼多香根者長寸妹之髮九三十

ト石瀬野馬太伎由吉豆ふと有る言ふて拵り揚るを云ふ

馬太具ハ千綱を拵りて頭を引揚るを云へ一然也

バ此ハ左右の手を張り袖を拵り揚て彼水鳥の

胸見ろ如くよ一て吾著装いたる衣を好一口惡一や

さ見ろを云ふり今世人も新衣あは初めて著たる時

ハ必然爲て見ろ物不意補と云きたるハ實然言ふ

り。一補猶多具の例ハ皇極天皇二年御紀童謡ハ伊波
能杯你古佐屢渠梅野俱渠梅多你母多礎底騰

哀囉極歌麻之之能鳥賦鳥も有る多疑氏ハ擧而めて此

も同一意に見ゆ又万葉十卷卅六下ハ手寸十名相

有る元曆本ハ氏母須麻ル訓た事ありと云拵備

よて聞ゆめり又古今集ハ海士の繩拵き云六帖ハ

海士ト爲て拵繩云土佐日記ハ不意ハ風吹て拵

けどもト後へ退き退きて云中務集ハ人

の家より瀆流きたる馬牽留めたる男有り如何で

ハ過て行く川浪の多岐留る宿の花ト

本花を前ト○許礼波布佐波受ハ上あり麻都夫佐尔の

反よて此ハ不相應あるを云ふり記傳ハ此者不直ハ

り宜一くずと棄ふ意あり俗ハ氣ハ人ぬと云意ハ

り氣ハ人たら事と布佐比乃方ハ源氏物語ハ見んた

リと有り猶委一ハ傳六ハ注ハ今云限ハ非

ず○幣都那美曾述奴岐宇氏ハ記傳ハ於邊浪磯腕

棄ありと師説るる宿浪の寄る磯ありと云へる
を直し浪磯とて言續りぬ似たきと万葉上白浪
乃濱松之枝を詠りし目格よと那美、那岐の反よ
て本ハ浪の立騒くを云ふとハ那美曾よて即浪の立
騒く磯と云意る、土左日記歌ハ風上寄る浪の磯業
ハ鬻し春も得知ぬ花のよ不咲く此も浪之磯と訓り
宿棄を宇豆と云ハ御誓段ハ吹棄と有るも書紀ハ此
云浮枳干都屢と所見たる落窪物語ハ逐棄しと云事
を於比宇豆と有り又後世定家御歌ハ一と禊す
麻の立葉ハ宿母毎ハ荊程も益く投宇豆都あり大和物

語ハ石豆都とも云り一と有るも能通り猶宇都の事
ハ傳十百八十十五二百注りき○蕪庭抄理能ハ記
傳ハ鳩鳥之よて青の枕詞あり其ハ和名抄ハ尔雅集
注云鳩小鳥也色青翠而食魚江東呼為水狗和名曾比
文徳天皇録魚虎鳥用三字今按魚虎見兼名苑等ハ有て
其色殊ハ青翠けしハあり字鏡ハ鳩曾尔と有ハ鳩字
を寫誤まらるゝし宿天若日子段ハ翠鳥と有る書紀
ハハ鳩と有るハ此鳥あり此ハ今世ハ川世美と云物
よて燼囊抄ハ少微ヒウビと云り曾比少微世美あるハ皆蕪
尔の訛まらるゝ綠色ミナソイロと云り翠鳥色ツキトリイロの曾を省けるハ

△日本私記用字

△アコトハコトイハ
 △アコトハコトイハ
 △アコトハコトイハ

可シコ云レセル字鏡ニ鶴ノ加利又万奈柱ト訓ス
 如何若クハ鶴ノ種類ヲ
 心得ズ名義ノ木狗曾比コ有リ又字鏡ニ鳩ヲ
 曾ル有リ名義ノ鳩ノ俗ニ字又云レ俗ノ字ト有リ
 訓ヘ鳩ノ水鳥久呂登理ト有リ若キ其ノ心ハ青ノ
 諸ノ黒コ大ク違ハリ又魚ノ鹿ノ鳥ノ同ク曾レ比コ訓ス
 翠ト書リ爾雅注ニ小鳥也青ノ翠而食魚者ト有リ是レ有リ也
 ○阿遠岐美祈斯遠ハ青ノ
 御衣ヲ有ル此ハ後ノ御定ニ紫ヲ上ト緋其次ハ緑
 其次ハ黒キ服色ヲ用フル如ク上代ノ皂色ノ上ノ
 在レ色也猶赤色ノ下ニ在レ高ハ一事此ノ御歌
 みて知ル其ハ孝徳天皇大化三年御紀七色一十三
 階ノ冠ヲ制メ了ス也云々小一日織冠云々服色並用深

紫二日繡冠云々三曰紫冠云々服色用浅紫四曰錦冠
 云々服色並用眞緋五曰青冠以青絹爲之云々服色並
 用紺六曰黒冠云々服色並用緑七曰建武初造又以黒
 絹爲之云々有テ紺と緑とハ共ニ青衣有るを見心
 其後天武天皇十四年御紀ノ初定明位以下進位以
 上之朝服色淨位以上並用朱華朱華此云正位深紫直
 位浅紫勤位深緑終位浅緑追位深蒲菑進位浅蒲菑と
 有テ緑色ハ深浅共ニ中間ニ在リ又持統天皇四年御
 紀ノも服色ノ御制有テ其朝服者淨大壹以下廣貳以
 上黒紫淨大參以下廣紫以上赤紫正八級赤紫直八級

緋 八級深緑 八級浅緑 追八級深縹 追八級浅縹
有て一は黒紫二は赤紫三は緋四は緑五は縹六有て
始終異なる事並し其七年は詔令天下百姓服黄色衣奴
皂色と有とハ右九百七十一注々ハ如く黒衣ハ最下ハ
在て其上ハ青衣ありしめて此ハ大国主神の先黒
御衣を不亘こして次ハ青御衣ハ及ハせ給へり次身
も自然ハ相叶へる者あり若て衣服令の御制もも
諸王以下臣 下の朝服ハ一位深紫衣三以上浅紫
衣四位深緋衣五位浅緋衣六位深緑衣七位浅緑衣八
位深縹衣初位浅縹衣と有て元位 黄袍家人奴婢橡

墨衣と見えたり若て其縹ハ説文ハ縹青白色と有て
青色の浅きもて歌詞謂ゆる浅花田是なり其深縹ハ
右ハ引る孝徳天皇御紀ハ緋字を訓せたり釋名ハ
紺深青含赤色也と有が如し又浅緑深緑共ハ緑字を
訓るハ記傳ハ翠鳥色の略と云とたりも著く字ハ
碧とハ翠をも用ふると韻會ハ緑を青黄色東方之間
色と注し碧を深青色翠を青羽曰翠と注し俗ハ云
ふ萌黄色是なり 諸色ハ如此く緋と緑との差別ハ
有る事ありしなり共ハ青色あり事右の御紀の文ハ依
て辨ふ可きなり 如此く神代の古儀己ハ紫赤を先ハ

一青^色中^一皂色と下^一置^一たる事令條の御制と
 相同ト^一を世の尊者良^一と爲^一ヨバ其御制^一も階唐
 の制度を用ひさせ給へる者と思へら^一實^一の典故
 閣^一き説^一よ^一一^一る^一よ^一足^一ざら^一者^一る^一る^一一^一此^一限
 條の如^一き^一被^一取^一せ給^一へる事^一も^一非^一と^一も
 兄^一て^一の^一狀^一ハ^一此^一に^一在^一る事^一る^一を^一文^一を^一假^一て^一書^一させ
 給^一へる者^一る^一事^一も^一更^一あり^一因^一云^一右^一の^一如^一く^一青^一色^一ハ^一上
 古^一より^一の^一貴^一色^一み^一て^一非^一リ^一中^一は^一高^一津^一宮^一段^一凡^一迹^一臣^一ロ^一子
 の^一事^一を^一其^一臣^一脱^一著^一紅^一綯^一青^一摺^一衣^一之^一見^一え^一朝^一倉^一宮^一段^一ハ^一天^一皇
 登^一幸^一葛^一城^一山^一之^一時^一百^一官^一人^一等^一悉^一給^一著^一紅^一綯^一之^一青^一摺^一衣^一之^一有
 る^一此^一青^一摺^一衣^一ハ^一古^一より^一神^一事^一ハ^一被^一用^一る^一服^一み^一て^一位^一階^一ハ^一抱
 け^一ず^一著^一事^一も^一凡^一て^一の^一狀^一ハ^一別^一る^一け^一也^一ハ^一右^一件^一の
 青^一衣^一の^一例^一ハ^一○許^一母^一布^一佐^一波^一受^一ハ^一此^一亦^一不^一宜^一み^一て^一相^一應
 等^一一^一り^一ず^一ハ^一○夜^一麻^一賀^一多^一示
 一^一て^一申^一ある^一事^一上^一る^一を^一同^一ト^一例^一る^一○夜^一麻^一賀^一多^一示

今高津宮段と云其
 里百廿廿六其其
 之山也而献大御飯
 云天皇到坐其境
 子之様也其歌曰
 夜麻賀多途上麻那
 流向真那世云云
 有と説傳平五三
 山縣と云山あり山と
 云山凡て縣と云其
 上曰々本山田の事や
 此地名と山方と負る
 此山田の有り候
 一と云る一と云る
 なり

ハ記傳ハ山縣ハ有^一但^一此^一ハ^一地名^一ハ^一非^一ず^一唯^一山^一の^一縣
 あり^一地名^一ハ^一在^一も^一本^一此^一意^一より^一出^一たり^一と^一有^一リ^一○麻^一坂^一斯
 ハ三^一言^一の^一句^一み^一て^一求^一し^一て^一此^一斯^一ハ^一謂^一ゆる^一過^一去^一の^一斯^一是
 あり^一同^一ト^一言^一る^一る^一右^一の^一高^一津^一宮^一段^一る^一と^一麻^一那^一流^一阿^一袁^一那
 母^一ハ^一蒔^一有^一香^一菜^一よ^一て^一其^一ハ^一蒔^一る^一此^一ハ^一求^一る^一大^一子^一其^一意
 異^一る^一思^一混^一ふ^一可^一ら^一ず^一○阿^一多^一足^一都^一伎^一ハ^一記^一傳^一ハ^一菑^一春
 々と^一契^一冲^一云^一り^一信^一ハ^一然^一聞^一ゆる^一赤^一根^一を^一阿^一多^一足^一と^一云^一ハ
 事^一ハ^一心^一行^一ず^一若^一ハ^一草^一書^一ハ^一少^一と^一書^一る^一と^一誤^一る^一や
 有心^一和^一名^一抄^一漆^一色^一具^一ハ^一菑^一春^一注^一云^一菑^一可以^一漆^一緋^一者^一也^一和
 名^一阿^一加^一祿^一と^一見^一え^一後^一殿^一雜^一漆^一用^一度^一中^一ハ^一深^一緋^一綾^一一^一足^一綿^一袖
 綿^一袖

○日本書紀傳三十一

○九百七十八

東經 苳大四十斤紫草卅斤云と帛一足苳大卅五斤紫
 草十四斤云と葛布一端苳大七斤紫草七斤淺緋綾一
 足苳大卅斤云と帛一足苳大廿五斤云と葛布一端苳
 大十斤云と見ゆ新し^{フイロ}バ此も緋色を染るる可し
 と注さ^レたり 万葉一卷十三下^ニ苳草指武良前野遊
 も紫色を染る^ルよ此草を用ふる事式^ニ見えずと雖も
 古ハ緋^ニ染る^ル紫を染る^ルも此根を用ひたる^ル日又書
 但同集^ニ多^ク苳刺日又未根刺畫^ニ續けたる^ル日又書
 を石の^ニ緋^ノ字音^ハ係^リたりと思ふ可^クず古書^ニ緋
 字^ヲ多く^ク阿^ノ刺^ト訓^ルる^ルも^ハ右^ノ等^ノ未^ニ根^ノ刺^ハ未
 丹刺^ミて^テ天^ノ日^ノ氣^ノ韻^ノ指^ニ來^ル事^ヲ云^フる^ル也^ハ此^ノ阿^ノ加
 足^トハ^同 ○曾米紀賀斯流逆ハ記傳^ニ深木^ノ之^レ汁^ハよ^ク
 深木^トハ^即上^ノ苳^ヲ以^テ其^ヲ搗^リたり^シ汁^ハよ^クと云^フる^ル

儲苳ハ草^ヲあ^らす^ルを木^トと云^フハ物^ヲ深^クし^テハ今^ノ世^ノ木^ノ草
 共^ニ凡^テハ^ハ深^ノ草^ト云^フ如^ク古^ノ草^ヲを^レ凡^テ深^ノ木^ト云^フ
 一^リ又^ハ木^ト云^フハ木^ハ植物^ノノ^ニ惣^テ名^ヲよ^テ草^ヲも^も巨^リ
 一^リ波^ノ岐^ノ字^ハ岐^ノ嶺^ノ之^レ伎^ノ余^ノ母^ノ岐^ノ布^ノ之^レ伎^ノ余^ノと^モ草^ヲも^も木^ト
 云^フ名^ノノ^多在^ルハ木^ト云^フ事^ハ也^ナ ^取要^ニ注^スさ^レたり^シ斯
 米^ノ許^ノ呂^ノ母^ノ遠^ハ記^傳ニ^テ深^ノ衣^ヲと^ルる^ル斯^ノ米^ノ曾^ノ米^ト唯^ニ同
 言^フる^ル云^フたり^シ深^ノ字^ヲを^レ斯^ノ字^ト訓^セたり^シハ^一万^ノ葉^ノ三^ノ十^三
 一^ノ酒^ノ壺^ニ成^テ而^シ師^ノ鴨^ノ酒^ニ深^ノ嘗^四二十^一ノ^ニ紫^ノ之^レ情^ハ深^ニ
 而^も猶^も多^ク二十^一ノ^ハ之^レ美^ハ尔^之許^ハ已^ニ呂^ノ奈^ノ保^ノ古
 非^ル尔^ノ家^ノ里^も有^リ ^又田^ノ造^ノ本^ノ紀^ニ謂^フる^ル深^ノ羽
 田^ノ造^ハ和^ノ名^抄郡^名ノ^ハ陸^ノ奥

用標葉を志波と有る是あふか本ハ
志美波と云り志宇波と云りけり
○許斯與呂志ハ
是其宜みて右ノ許母布佐波受と一處ニ出たる其反
みて相應ひて能整い備ハまる状なり記傳ハ此迄の
意を括りて云ハ今倭国ハ物爲る装ノ色ノ衣を
取著て試るハ苗ノ染たる緋衣是不心ノ叶ひて宜
まこと詠給ふる上ノ装ノ有る即此緋衣を著給へる
ある可一備如此装束も宜一け色ハ今ハとて出發る
いとせと云意言外ハ含まり取も云とたるか如く初
ハ黒御衣を著させ給ひ一りども熟見るハ相應一り
ふさりけりハ脱棄させ給ひ次ハ青御衣を著させ給

ひ一りども其猶似合一りどもざりけりハ脱棄させ御
在生々今度ハ緋御衣を一り御させ給ひけるハ是
ハ相應たる御衣あると宣はせて信ふ今立一御在
坐むと爲る氣ハいを示し聞えさせ給ひて此より其
留より御在生々嫡后の御事ハを御心易くす
思ひ聞えさせ給へるなり若此く物爲給ひて嫡后ハ
給ふ可く計りハ給へる御事と推量とたり其日
子邊神の出立一御在生ハと爲させ給へる事ハ指
迫りて給へる御事ハ此御向ハ許斯與呂志と斯の助
辞を置て給へる其斯ハ各ハ一買ハせり云ふ斯ハ
て其字の義ハ思ふ可一○伊刀古夜能ハ徒身族あり
と云義あると思ふ可一
記傳ハ妹と云ハ枕詞と聞えたり伊刀古とい人を

深く親睦む称めて伊カ富志伎子てふ事あり古字ハ
子の假字を用ふる此記の例あり万葉十六_二下_一子伊
カ古名兄乃君居ニ而物尔伊行跡波云こ八重疊平群
乃山ると有ハ八重疊_マハ平群ニ云む序あり居
ニ而云こと云を思へハ年久しく同居せし者_ノ状
是ハ名兄_ナとハ妻の夫を云状_ハ詠る語あり然_レも此
ハ夫を親睦トして伊カ古と云り又神樂歌_篠波_ノ佐
奈見也志加之加良左支也見之祢川久辛見名乃與佐
也_ニ曾礼毛加毛加礼毛加毛伊止己世仁_一乃伊止己
世仁_ニ世年也と有ハ御楯春_稻女之美_ヨ辛_カ其一哉彼_一

うて妻_ノ爲むと云意_ニ聞ゆ風俗_知歌_ハ伊止古世
乃加止仁天_宇止辛比佐_ハ天と有_ル睦_親トく爲る人の
門_ハ調度を提てと云事あり此等と彼万葉あるとを
合せて思ふハ夫婦ハ殊_ハ親睦_ハ物多_ク互_ニよ不
云けむ又彼從父母兄弟も本_ハ互_ニい_ハ親睦ト_云
しが定むる称_ハ成むるある可_ク略_ト云_レきたるハ實
もて聞ゆ_ハ説る_ハ心_ハ然_ル右_ノ伊カ古_ノ
下_ノ名兄の字脱たるもて伊カ古名兄名兄乃君子
君と云ずてハ當時四言ある例ハ多在_ル三_言京_ノ
ハ詠る_ハ頃_ハけ_レ右_ノ如_クもて從身_ハ副

夫を云あり可く篠波あるも從弟見よて右と同一
 可けま此も從弟族之妹命と云對し從弟之夫
 も云事なめり夜能の夜ハ親族の義之聞ゆ然して此
 右の御向有ハ大日主神須勢理毘賣命共素戔鳴
 大神の御子と申す申す其女神ハ一も天照太神の生
 坐ら御子坐せば從弟之聞えさせし事ハ實正
 然有め可き御事と思つる今も夫婦の間より
 從弟副と云て殊ハ親睦し物よ云あるハ夫婦よ於
 て異なき事なぐる其同族と云い甚親睦トきを以る
 るをも思合す可し記傳ハ夜能ハ能夜を下上ハ寫誤
 能夜て上例ハ能夜天皇御

紀歌子所符美能野禮那能倭俱吾も有と婦よて万葉
 十卷十八下ハ美奈力能也安之我奈可奈流古今集
 下近江のや鏡の山をめぐり猶有り夜ハ助辞なりと云
 きたまじも熟味ハい見ると此ハ然とも定め難
 夜能の夜ハ親族を片加良夜加良と云ふハ生族根族
 の義あり其ト同トくして其同族の謂るなり定穂官
 段ハ大日下王の妹若日下玉を大長谷王子ハ婚せ給
 ふとして御使を被遺たり一時ハ根臣ハ護りて己
 妹辛爲等族之下席而云くも申せらるも若日下王ハ大
 長谷王子といハ姑甥ハ當くせ給へらるも依て然申せら
 るるも思合す可し
 ○伊毛能美許等ハ妹命よて其嫡后ハ
 御在坐せども須勢理毘賣命ハ一も上件ハ如く殊
 尊奉せ給ふ可き殊ある田緒ハ御在坐を以
 るめり万葉五下ハ宇良賣斯企伊毛乃美許等能阿礼
 辛婆母伊可尔世與等可尔保鳥能布多利那良毘爲加

多良比斯許呂曾牟企豆伊幣社可利伊麻須と有る
 妹命も我喜めぐる崇りて云るる。○牟良登理能
 ハ記傳よ群鳥之よて群往者と云む枕詞るると有か
 如し其引きたる。万葉六四十子村鳥乃且之往者九十二
九子朝馬之朝之為管群鳥之群之行者十三十九子群
 鳥之朝立行者十七四十子並良等理能安佐太知伊奈
 婆二十三十四子群鳥乃伊泥多和加豆牟等騰己保理可
 幣里美之都又五十三武良等里能安佐太知伊尔之ふ
 と所見たる。○和賀牟礼伊那婆ハ記傳よ數多の従者
 等搔連ぬて吾群往者るると云きたるハ然る言ふか

我引往者の御句
 と以思ふよ
 ハよて引きたる此登母
 登須岐も其留り
 給ふ端后の御車
 此たる者と見ら

ら事足はず其端后の嫉妬の強く御在し坐か故し其
 妃等よ引きて共よ我群と御在し坐さばとある可し。○此北氣
 登理能ハ記傳よ所引鳥之るる此氣ハ比加礼の切り
 たるよて多く群居る鳥の中よ一か飛立ハ其よ引き
 て餘の鳥も共よ立を云ふ此も枕詞るる要と有り。○
 和賀比氣伊那婆ハ記傳よ吾被引往者るる彼數鳥の
 従者共の装立るよ引きて往を云ふ源氏松風巻子騷ハ
 一きよ引きて出給ふと有も入りの騷が立て引率行
 よ引きて行く意此に能似たり。万葉六四十子寧樂京
 と山背久遠都よ遷さきし時の歌よ皇之引乃と真尔真

荷春花乃遷日易村之乃且之往者之有引の任意ハ
京を引遷一給ふを云も非ず引率て往給ふ任意と云
義あり十九二十ノ宇都世美乃與能許等利等麻須
良字能比伎能麻ル之之奈謝可流古之地手左氏
云こ此等引率て往こ任よ引と行を云り」と有ハ信よ
然る言あり但八十神段も故其八上比賣者如先期美
刀阿多彼志都故其八上比賣者雖率来畏其嫡妻須世
理畏賣而其所生子者刺挾木侯而返こ有ガ如くあり
其餘の妃等の嫡后の御許よハ得一も侍るハ云び
て各佐處よ在けしガ、其是子遠神と共よ辭さる所

引往ハ物ハ思ふとトとりて此の年良登理能和賀年
礼伊那婆比氣登理能和賀比氣伊那婆那王登波よの五句ハ大國
主神と其妃等の御上を嫡后より宣ハせたる、御
事の御在一坐けいと兼て歌ハせ給へる状ありけ
ハ妃神等よ引とさせ給ふよ、從者の謂ハ非ざめ
り然ととも石よ東装立時と有ハ其夫神の御從者を
率て御在一坐す御事なりとも御歌の意ハ專其妃
等の事よ就て宣へる事上よ甚為嫉妬と有る文よ依
て察しむ可きなり源氏夕霧卷ある雲居鴉の詞よ舊
りぬる人苦一や甚今めり一く成變り御氣一若の
妻よ一も見習いす成よけ、事ありハ甚あり若
き縁てより習ハ一給ハてと託ら給ふも思くも非ず
云こ又如此心知あり腹立成一給へるハや目馴
て此息ころ今ハ怖ら一くも非ず成めたる神よ
氣を添バヤと歳よ成一給へハ何事云ふよ徳り

ハ倭国御在坐
見給て死むハ
宣ふハ
御心
不泣者汝者雖言
早知微流斯麻能佐岐
受和加久佐能都麻母多
の妃神の多く御在坐
群鳥の如く其よ群
くあよハ然事を見聞
い事ハ非ト物と宣ひ
御言を夫神の御方取

ハ倭国御在坐
と爲さ給ふ
此獨御座
坐しと爲さ給へ
る

其^此嫡^の后^のの御上を後見奉り慰め聞えさせ給ふ所
ろよて實よ有く時欲く親び交し給へる御意味有て
哀とと何とも云ひ方を御事よあり御在坐
夕○夜麻登能ハ石よ自出雲將上坐倭国と有る其国
を指て宣へるる此大神の倭国よ去せ御在坐
上の其女神の獨物よ成て歎りて御在坐
宣ふとて倭之一本薄よ寄せ給へるる
本之ありても有し倭国之と云よハ非^其處^又山
留り給ふ人の上を差て行く彼方の倭の物よ誓へし
車如何又薄ハ何處^もに^く多^在る^物ありし
みして遠き倭のを云ひ事も由なく又某野より某山
と云ハ似著ハ^りり^る物^を泛^く倭^の薄^せハ殊
る名産あり^ハころ有^る物^を泛^く何^で云^ひと云^ふ

○日本書紀傳三十一

○九百八十六

たゞ一應ハ然ル事あり。此より伊臣毛能とも宣ひ
 難き所あり。其差て御在し坐す国名を立入さる。給
 ふと見らる。何。○此登母登須岐ハ一本薄あり。凡て
 薄ハ葦取生る物と一本と一も宣給へら。其夫神の
 御群ハ悉し倭国に移し給へ。水バ女神の唯一柱よて
 御在し坐し事を誓へさせ給へら。記傳ハ和名抄
 薄尔雅云草衆生曰薄新撰万葉集云花薄波奈須二
 木辨色之成云草草和名上同今按草草盛也見唐韻三有
 り書紀神功皇后御卷仁徳天皇御卷も。ハ秋を須
 岐と訓り夫木集薄の歌 中ノ氣輔卿紫の一本薄
 家集ハハニのハ 高津官段大御歌ハ夜多能比登母登
 一本菊よと有り

須宜波。古子不持。之多受多知迦河礼那牟河多良須賀波良許
 登哀許曾須宜波良登伊波未所多良須賀志賣又八田
 若耶女答歌ハ夜多能比登母登須宜波比登理袁理登
 母意富岐斯與斯登岐許佐婆比登理袁理登母。此見
 え拾遺集物名ハ一本菊と云と有り補と云と有り。今
 よ云ふ一本薄と云物有と云其ハ後世ハ号る所ハ俗
 一て其ハ別あり。右よ云る如く薄ハ衆生る物ハ
 りよ對へて一本薄とハ詠給へら。一種の名ハ
 非ず如此く薄ハ一本薄とハ宣へら。仁賢天皇六年
 御紀ハ秋菴之轉雙納の語有が如く夫婦の中ハ一も
 離とす。一も其ハ衆集る物あるを如此所を易て任給
 へら。上ハ薄の一本毎ハ。○宇那加夫斯ハ記傳ハ項頌
 別と云る如しと有り。あり和名抄ハ陸詞云項頌後也和名宇奈之書紀神代

榎子

卷ノ頗頗此云歌茅志キ有リ俗ノ物ノ下より上の勝
て頗くを加夫久コ云是るリ此ハ頗ハ頃を重頃クもて
泣く状を云ふ楮上ノ一本薄ニ置るハ一本立ルり
頃ノ意ヲ連けたる天智天皇御紀ノ稻ノ事ヲ重頃ニ而
熟クと有りと有ハ然る説ル加夫斯ノ義ハ傳四ノ十
豊香節野尊ノ下ノ己ノ注リ此岸那ノ夫斯ノ語ノ一書ノ
低徊愁吟ト有る低岸ノ岸那ノ流ノ訓ルも頃重ノもて
右ト同意ル名義ノ低ノ加多夫久ノ又多流ト云訓
有ル思合ル○那賀那加佐麻久ハ上ノ那加士登波那波
伊布登母ト有る不泣ハ嫡后ノ宣へる御言ルを然
ハ宣ふトも愈我ガ倭国ノ物ヲ寫ルよ至りてハ汝ガ將

泣シと危クも聞えさせ給へる多ク記傳ノ上ニ此も汝
ハ須勢理毘賣命ヲ指り麻久ハ岸ト云ト同意シて麻
志ト一辞ありを下へ語ヲ續けしとて麻久ト活ル
云ル取ト云リ○河佐阿未能ハ朝雨ノ之もて
霧ト云ハ發語ありと聞レ朝雨ノ名残多く霧ト成ル
即晴行ク
成ルハ餘ハイリカカ者あり上代ノ意ハ非ル可
○疑理迹多々ノ叙ハ於霧將起ノ不レめて
句あり此を二句ト爲ス時ハ次ニ和加久佐能ト有ル

記傳ノ疑義ハ多ク有リ
補ハたシても二
削リ可ク疑ハ擲キ
るハ後ノ如ク清ク

間より一句餘刺アミリモノと成て調を成さざるなり記傳より朝雨
 の唯霧を云ひ料のこみて歎息ハ長息を初めたる物
 たりして長く吐く息なり狭霧より起し物なりとる息の
 霧よまよと云ハ百葉五六十大野山紀利多知和多流和
 何那宜久於伎蕪乃可是尔紀利多知和多流十五十四
 も君之由久海邊乃夜掃尔奇里多ニ婆安我多知奈氣
 久伊伎等之理麻勢又秋佐良婆安比見牟毛能乎奈尔
 之可母奇里尔多都信久奈氣伎之麻佐牟ニ有り又源
 氏明石卷ニ歎つゝ明石の浦ニ朝霧のまよと人を想
 像る我るど見ゆ偕那迦士登波より此迄の意を括り

て云ハ今吾離別とて倭へ往りバ汝こそハ心強く
 泣ト云宣ふとも必吾を戀想じて甚く泣つゝ歎りむ
 ずとる取と云きたりか如くめて其立別と御在
 坐む後の御歎を想像り聞えさせ給へるもて其夫神の
 又益々愛るゝと思ふす由を聞えて其御答の状に依
 てハ留りて御在し坐て以前ハ勝りて相善しく
 為させ給はむと云ふ御意を含めさせ給へる者あり
 けり記傳の此所より至りて信の難き事ニ有り其一ハ
 ハ此を四言二句の定めたるなり然れども
 此を二句の爲る時上下の句數は合さざるハ此ハ思
 誤くしたる且下より行るを此へ廻してハ言さ定
 りたるも穩るぬ心ならず其ニハ汝泣む其涙
 ハ朝雨の如くまよとたしども右より引る如く朝雨ハ

唯霧と云は料のこもて有べきを其を
 涙の事よ取らし事強たふし似たり ○和加久佐能
 ハ次あり嫡後の御歌ありも有て若草之るり仁賢天皇
 六年御紀よ於母亦兄於吾亦兄弱草吾夫何怜其之有
 て言弱草謂古者以弱草喻夫婦故以弱草爲夫之注と
 也たふか如く夫よも婦よも係る發語あり万葉二
 四子若草乃嬬之念鳥之又四子若草其孺子者七八十
 一若草嬬益公九十九一若草乃夫香有良武十三十
 稚草乃妻手枕迹十一子釋草妻所云十三二十子若
 葛之妻香有良六又三十推草之妻裳將有等二十十八
 一若草能都麻牟母麻可受又三十若草乃都麻波等里

都吉又七三若草之都麻母古騰母毛あり有を冠辞考
 一此ハ春の若草ハ珍しく愛しあり物ありハ夫
 婦よ譬たりと注さたり又三十三一春草之益目類
 四寸吾於富吉美可聞と有ハ若草の芽と續けりあり
 十一十七一若草乃新子枕字巻始而ハ考ふ若草ハ即
 新しき草ありハ女と新枕巻くよ云係たりと見え十
 三九一藤浪乃思纏若草乃思就西と有を考ふ此ハ若
 草の如く愛しと思付りてハ意ハ續けたりと有り
 又十一十七一振別之髮字短弥青草髮尔多久盤妹手
 師曾於母布と有ハ古ハ若草を以て髮の装とも成り

右の伊勢物語
は初草の何と珍
しき草の何と珍
しき草の何と珍
しき草の何と珍
しき草の何と珍
しき草の何と珍
しき草の何と珍
しき草の何と珍
しき草の何と珍
しき草の何と珍

たりと見ゆ十七四十子和可久佐能阿由比多巨久利
こ有ハ若草以て行纏ハナと成せると云あり諸若草之ハ
都麻と云ふ發語ありと伊勢物語ハ昔男妹の甚美
情若し根直げし見ゆる若草を人の結ハ
心事を不思ふと有て此ハ後世久方を天の事と
足曳を山の事と為ると同トウ可但右の三巻ハ
春草ハ字の
如く訓て有ぬ可一巻十七下ハ春草之茂生有ハ卷
十四下十五下十八下ハ春草之有ぬ何と和加
訓たどども右の春草之芽之續けて直しき所ありハ
春草之も此の若草と同ト成るる一の發語と所見た
ヤ○都麻能美許登ハ妻命よて須勢理毘賣命を指
給へり由記傳よ云きたるが如し如此く結末よ其指

ナ人名を云ハ右の沼河北賣命の歌も有て其言續
く事強く令知むとてあり今俗語の上あり其
意味を熟く令知むとてハ其末よ必人名を云添るも
同ト格なり

尔其后取大御酒坏。立依指舉而歌曰。夜知富許能。加微能美
許登夜。阿賀。淤富久途。奴斯許曾波。遠途伊麻世婆。宇知微流。
斯麻能佐岐邪岐加岐微流。伊蕪能佐岐淤知受。和加久佐能
都麻母多勢良米。阿波母與。賣途斯河礼婆。那遠岐豆。遠波那
志那遠岐豆。都麻那斯。阿夜加岐能。布波夜賀。斯多尔。牟斯
夫須麻。尔古夜賀。多尔多。久天須麻。佐夜具賀斯多尔。阿和

由岐能。和加夜流牟泥遠。多久巨怒能。斯路岐多陀牟岐。曾陀
多岐。多多岐。麻那賀理。麻多麻傳。多麻傳。佐斯麻岐。毛毛那賀
迺。伊遠斯那世登與美岐。多豆麻都良世。如此歌。即為牟伎由
比。四字。而。宇那賀氣理豆。六字。至今鎮坐也。此謂之神語也。
其右と申すハ右ノ謂ゆる。嫡后より即須勢理昆賣命
其の御事あり。○大御酒杯。朝倉官段より。大御盃より作
り。大御ハ天皇ノ限りて申奉る御事より。在るに
當昔比大同主神より並ぶ可き大神一御在り坐ざり
けとバ萬ノ尊と奉る事の後ノ天皇の如き御有状より
御在り坐けとバ。今も其現御神と相並ハ一御

在り坐て幽事を治させ御在り坐せバ萬ノ其心一も
崇より奉る可き御事此一事を以て思及ぶ可し酒
杯ハ一葉五十八ハ鳥梅能波奈多礼可有可信志佐加
豆岐能信尔七二十ハ遊土之飲酒杯ハ五十ハ酒杯
尔梅花浮るが有り記傳ノ名義ハ此ノ書ヲ如ク酒を
盛杯する杯ハ斯る器の惣名あり。和名抄瓦器類
ハ盃一名厄盃亦作杯和名佐賀都木方言注云盃盃之
最小者也和名同上と有り杯ハ杯とハ別る。と有り
名義抄ハ杯音盃佐加豆伎と有り杯ハ瓦末焼と有て
都伎とも佐加豆伎とも波尔とも訓こ土器。本器と
ハ依り字。○之依ハ夫神の東装一亭一御在り坐て
異有るなり。

事なり

御馬に乗じと爲給へる所より依て給へるなり。○指
 擧ハ記傳ハ佐ノ旨ニ訓べ即佐志阿旨を約めたる
見宮殿ノ具天ノ依以此高麗大御言以獻を見
 言ふて此の字の意なり。朝倉宮殿にも三重妹指擧大
 御蓋以獻と有り。と見ゆ猶此字ハ其穴穂宮殿にも指
 擧角者枯樹と見え。万葉二三四ノ指擧有幡之靡者ふ
 ども有り。又顯宗天皇御紀室寿の所ノ脚日本此傍山
杜鹿之角擧而吾儕者皆酒餅香市不以直買
と有り擧るも佐ノ旨也。○夜知富許能句加微能美
訓りハ此ノ酒ノ故なり。○許登夜ハ八千矛神命也。と夜ハ如薛ト與ト云ハ
 如ト一ノ記傳ト云是也。○阿賀有於富久速句如斯許
 曾波句遠近伊麻世婆ト此所如四句如成すト一ノ事足

ハズ阿賀を一句と一於富久速を一句と爲ざる時ハ
 句數合ざるを以る。但二言の句ハ例なきが如し。と
 雖も上古の歌ハ謠物よて其言の合五言ト逆音を引べり
 りけしハ二言よても三言よても同一事なり。故神武
 天皇戊午御紀の 謠ハ伊弉波豫句伊弉波豫句阿阿
 句時夜鳩句云々と有て阿阿を五言ノ時夜鳩と七言
 ノ富たり又古事記ハ其時の大御歌ハ疊疊引音志夜
 胡志夜又阿何引音志夜胡志夜の御句有ハ各二句宛不
 る事其疊疊ト阿阿トの下ノ音引と有を以て其二言
 ろるも五言ノ調々ノ事を知へきなり。此を以て阿賀

の二言のしを一向る事更に論じし毎に可き者よ
る記傳は阿賀於富久述の六言を一向と定ると
の如くある事なり阿賀ハ次ハ阿波母與賣述斯阿礼婆
とも有て阿之阿賀ハ傳六ハ十ハ注ろが如く此ハ
多く夫婦の中間にて互に相親しを愛くししを本と
して或ハ入よ怜を乞い又ハ尊ふ時ハ當りて其志
の程を向ふ入よ全知る時ハ何れも阿又阿賀と云
例あり四神出生章第七ハ書ハ吾夫君此云阿我儼勢
と有る古事記ハ此を我那勢命我那迹妹命と作る
我ハ例ハ依て阿賀と訓べき所なり又天孫降臨章ハ

故天稚彦親屬妻子皆謂吾君猶在則攀牽衣帶且喜且
慟と有る吾君を阿賀志那岐と訓る吾徳君とて親
睦とむが故なり其第一ハ書ハ豊葦原中国是吾兒可
王之国也と有る吾兒を阿賀美古と訓しハ皇太子に
爲て尊と親し奉りて給ふ由なり又神武天皇戊午
年御紀御歌ハ阿誤豫阿誤豫と有る吾兒ハ吾兒ハ
て將卒を親しませ給へるを以る又崇神天皇十年
御紀ハ亦其卒怖逃云々知不得免叩頭曰我君と有ハ
其怜を乞ふ爲ハ阿美と云る又古事記日
代官段倭建命の美夜受比賣ハ賜へる御歌ハ麻迦牟

登波河礼波須礼村佐近牟登波河礼波意母問村と有
も其姫と婚しと爲る故に親として阿礼とハ詠せ給
へり又訶志比官段よ於是其忍熊王與伊佐比宿祢共
被追迫乘船浮海歌曰伊奢河藝云と有と右る我
君の例よ目ト其明官段よ於是大皇問^問天山守命與大
雀命詔汝等者孰愛兄子與弟子尔大山守命自愛兄子
次大雀命知天皇所問賜之大御情而白兄子者既成人
是無愧弟子者未成人是愛尔天皇詔佐那岐河藝之言
如我所思と有て此よ皇子をいへ阿藝と詔給へるハ
其白賜へる事の御心よ叶はせ給へる任よ甚く尊き

聞えさせ給へるなり此等を以て和又和賀と云と阿
又阿賀と云ふハ大ニ差別有る事を明くむ可く故此
も日子還神の御歌よハ牟良登理能和賀牟礼伊那婆
比氣登理能和賀比氣伊那婆と有ハ后神の御許を放
りて倭国よ上坐しと爲る所あり故に和賀と詔へる
を此よ后神ハ争て留奉るハやと思ふすを以て阿賀
とも阿波とも宣ひ知るて給へる者ありけり故源氏
とよ阿賀伎美と云ハ何時も向の人を一向は仰ぎ尊
心所よ云り又其人も指迫りて佗よ心を著ざり時よ
阿賀佛と云て其頼も重くする人を佛よ成しとも云
り又紅葉賀卷よ中將争て我と知くも聞えトと思て
物も云す雀甚し怒ぬる氣よ持成して太力を
引抜けハ女吾君と云と白いて手を摩りて殆笑も

焉べしと有ハ怜ミと云ふ方有るなり又落四物語ニ
卷ノ翁装束解テ控寄ミバ女阿賀君如此勿爲咎心
甚しく痛き程ハ起テ按ヘたミ少シ治ヨウ心心
す後を思ミバ今夕ハ唯ハ卧給ヘ云ク有モ怜ミ
を云ふ方○於富久速ハ一句ハて次句を合せて大國
主神ノ御名と成多リ此御名ノ御事ハ己ノ傳廿四
丁廿九ト注一奉ラカ如ク御文大神より爲大國主神と
事任させさせ御在一坐て天下ノ在ゆる諸國ノ國主
神と総攝御させ給いて天下を主領キ給ふ由ノ尊号
ありけしバ此ハ少彦名神ノ常世郷み渡らせ御在
坐けら後ノ天下ノ獨立せ給へる御名ノ坐り又右百
六ト注トカ如ク御事の中己己夜麻登 と言ふ同号ノ有也

以ても此ハ上るハ千ノ神沼河比賣との贈答の時
よりハ甚く後る事を知べし○奴斯許曾波の奴斯
ハ右ノ云ふ大國主ノ主あり許曾波の結ハ次あり和
加久佐能都麻世多勢良采是るり儲右ノ阿賀と此ノ
奴斯とを合せて阿賀奴斯と云て彼阿賀奴斯と意味
通へる語有り廿五六ト注ト阿我農師能美多麻多麻
比豆波流佐良婆奈良能美夜故尔呼佐宜多麻波祢と
有をも此事ハ別考合す可し○遠途伊麻世婆ハ於男坐者
よて次ノ阿波母與賣迹斯阿礼婆と己命ノ御事を宣
ハむ爲ノ先其夫神ノ御事を聞えさするなり○宇知

微流ハ打見あり打と撥と並云例ハ万葉六二十下天
 皇服宇頭乃御手以撥朕曾祢宜賜打撥曾祢宜賜と有
 是あり打ハウラシ移りて他ハ心ヲ移し物為る事にて撥
 の反あり撥ウラシハ打延打羽振打放るゝの如く凡て打
 某云語の多在るハ何れも物ハ在り事ハ在り他ハ
 移し物為る義の時ハ云語あり万葉八五十下吾屋前
 之冬木乃上尔零雪辛梅花香常打見都流香裳と有る
 此雪を雪と見るハ唯見る事ありを梅花りと形容た
 るが即打見と云物あり此にて心得べし又此ハ打見
 る島の崎と詠せ給へるも眼前眼へ引付て見らる可

事所ありごとハ眼ヲ移して遠く望見る意あり者ふ
 り然とハ万葉集三卷廿七下田兒之浦從打出而見
 る者十三卷六下相坂辛打出而見者と有るも生
 るがハハ見たりごと故ハ從出て望む義あり凡
 て打某と云例何れも此と同一可記傳ハ打ハ
 萬事ハ添云言あり○斯麻能佐伎那伎ハ記傳ハ島之
 崎とあり万葉六十八下許伎多武流浦之盡往隱島之
 崎と隈毛不置十三下近江之海泊八十有八十島之
 島之崎邪伎ありと有り○加岐微流ハ撥見あり
 万葉二二十下天雲之八重撥別而四五十下撥探友手
 二毛不所觸者五二十下可吉掃豆和初礼立待八三十下
 朝奈藝尔伊可伎渡又三十下指折可伎數者九十八下加

○日本書紀傳三十一
 ○九百九十七

吉能常代尔至又二十搔露之西零夜子十三十四搔
 将景破薦乎敷而所搔将折鬼之四忌乎十四子二十
 可伎武大伎奴礼押安加奴乎十九二十子二十之我婆多婆
 吾等尔可伎益氣ふと云ふ搔ハ物を書く痒を搔ふと
 の言と同トくして彼ト云此ト搔寄るめて打の此ト
 り彼ト及ぶとハ自然ありて其反あり然トバ島ハ遠
 ト依て打見と云い磯ハ近きを以て搔見と語を換て
 對へさむ給へるあり海官遊行章ハ竊往覘之と有る
書て加伎麻美と訓せたり伊勢物語ハ視其私屏も
て中古の物語書ハ加伊麻美と云事ハ多在るを古き
抄物ト垣間見と注せしむと搔間見よて搔覘ト事ハ
云ト聞ゆれども誰とて在物ト寄所ト事ハ遺ト下

○伊蘇能佐岐淤知受ハ記傳ハ磯之崎不落あり万葉
三十九ト十磯前櫓子回行者六三十九ト付將賜島之前依埼
 將賜磯之埼前十九三十九ト佐之與良乎磯之埼ハ
 と有り式ハ因幡国ハ上郡伊蘇乃佐只神社ト云ト見
 淤知受ハ漏さざる祈年祭月次祭等詞ハ島能ハ
 十島陸隨車毎皇神等能依左奉故万葉一十五ト隈毛不
 落思乍叙来又二十川隈之八十阿不落九十四トハ三河
 之洲瀬物不落十五十七ト子之賀能安麻能一日毛於知
 受ると猶多在り猪契沖ガ上の島之崎トハ崎ト云
 小崎毎ト云意有り今ハ磯之崎ト云故ト不落ト

こ云り今落不こ云よて島之崎不不落不先を兼へ
 と云り神意こ有り契神の意ハ島之崎不不落不磯之崎不
意每不落不と云ふふり入神名式ノ常陸
 国鹿島郡大洗磯前藥師菩薩社名神大那賀郡酒
 列磯前藥師菩薩社名神大那賀郡酒
 伊曾良加左支仁三
有此の例るり
 ○和加久佐能ハ右九百八十九下八云り
 ○都麻田多勢良米ハ記傳妻將持有り年之云べ
 きを米之云ふハ上の許曾は應へるるりこ有り如し
 借上の大國主と申す御名を置て打見る島之崎ノ搔
 見る磯之崎不落若草の妻將持有と有る處ニ物爲
 させ給ひて御妃等を娶りて給へる御事を宣へる物
 〴〵此御句共と引續けて見奉るよ己の大國主神と

御在一坐て實よ天下ノ獨立て御年一坐つも世中
 ハ御心の任に周旋い給ひ御事多見えさせ給へ
 りけり上ノ自後同中所未成者大己貴神獨能巡造遂
 到出雲國與言曰夫葦原中同木自荒芒至及磐石草木
 成能强暴然吾已摧伏莫不知順遂因言今理此国唯唯吾
 一身而已其可與吾共理天下者蓋有之乎云こと有る
 當昔の御有状を想像り奉る可くして甚ニ御盛ふ
 る趣見えさせ給へりけり但女神の島之崎ノ磯之
 意有べし其ハ右ノ謂ゆ同情同宣伊蘇乃佐只神社子
 就てハ上比賣命ノ事を思ふ可く又上九百四十五
 丁ノ注ル如く沼河比賣命ノ御産所ハ能登用る
 又古ハ越洲と云ふ一島あり一島あり一島あり其

御意を合めり。○河波母與ハ記傳ハ河波ハ吾者もて
 田與ハ助辞多ク顯宗天皇元年御紀大御歌ハ護謀還
 抱申。奴底喻羅俱慕與。又於岐每慕與。阿甫亦能於岐每
 可葉一トハ籠毛與美籠母知布久思毛與美夫君志持
 五トハ母智騰利能可ハ良波志母與十四トハ比古
 布祢乃斯利比可志母與有リ又此を母夜トモ云
 リ右の於岐每慕與の近飛鳥宮段ハ意岐米母夜ト
 見え皇極天皇三年御紀歌ハ抱我佐基泥佐基泥曾母
 野。我底騰羅須謀野。又於母提母始羅孺伊勢母始羅
 孺母也。可葉二トハ吾者毛也安見兒得有るト有る

三右の沼河日賣歌ハ
 奴延久佐能賣連志
 河礼婆と有り備
 此ハ

四又四卷三十三トハ吾
 世子之住リ可
 將進跡者ナリ
 雖念午弱喜身
 之有者之有也
 此御歌の意味ヲ
 以たり

是多ク補ト有るニ明クハ此母與母夜の母ハ歎息
 夜ト受て其意を強く寫るト此夜ト云リ。○賣進斯河礼
 婆ハ上ハ遠進伊麻世婆ト置給へる御向ハ應へさせ
 給へる。記傳ハ女進斯在者多ク斯ハ助辞多ク可
 葉三トハ石戸破子口毛欲得手弱寸女有者為便乃
 不知苦あじも有リと見えたり。○那遠岐互ハ記傳ハ
 契冲云ク除而あり於岐ト有べきを於を略けり今
 俗ハ遠之と書けバ汝除ト辞意ハ詔へらうと思ふ
 可けと然ハ非ず置ハ於久の假字ありト云リ置ハ
 於を省く例ハ日置玉置ると常多在る中ハ此ハ殊ト

遠よ於の韻有き^ハ猶更の事多^ク神樂歌^春和礼字
 支天不多川^百止留世^之有^ハ除我而取^二妻^一辛^ル風
 俗歌^君置^天子木三辛支天^之有^ハ除君而^ル子一本^子
 木^宇於木天^之有^リ補^セ云^ニた^カ如^小百葉五^九
 安礼字於伎豆人者阿良自等^十ハ^子除雪而梅莫^戀
 十二^{二十}君辛置者知人毛^無又^四十月雨之間毛
 不置^{十四}三^十比毛登久毛能可加奈思家^字於吉氏
 十七^四許礼字於伎底麻多波安里我多^之十八^二
 一^子天^大王能三門乃麻毛利和礼字於吉豆且比等波阿
 良自等^之有^ハ本語の任^多ケ^ルを此の二の那遠

岐豆ハ信^ノ那遠於岐氏^ノ略^有事疑^無可^キ者^子
 凡^レて詞^ヲを約^ルと延^スとい^ハ意^ノ緩^急預^ル事^ヲ
 給^ル事^ヲ急^ムル^カ御在^一坐^さる^由を告^聞え^さ
 故^ニ自^レ抑^スル^カ○遠波那志ハ夫者^無て^ハ洲
 起元章^ヲを始^トと爲^テ常^ニ夫婦^ト書^テ賣^遠と云^ハ夫是
 あり上^ノ遠^途伊麻世婆^ト有^ル遠^ハ男^女を賣^遠と云
 ぶ男^ヲて言^ハ回^トき^るる^グ其意^大子等^一く^ズ和
 名杵夫妻類^ノ夫白虎通云夫^ヲ猶^扶也^以道^扶接^也^{和名}
 止^一云^辛止^と有^ル辛^宇止^ハ男^人の音^便る^ル皆^此御
 言^ヲを發^シ給^へる^ハ御父大神^ノ御言^ノ意^礼爲^大国^主
 神^爲宇都^国玉^神而^其我^之女^須世^理毘^賣爲^婿妻^而於

宇迦能山之山本於底津石根宮柱布乃斯理於高天
 原冰椽多迦斯理而居是奴世と詔給へる大命を蒙ふ
 リ御在り坐て此二柱神相共其宮に御在り坐て天
 下を治さて給ふ可き甚止事なき御事の御在り坐か
 為よ海を除て夫ハ毎一と宣ひて我を除て 后ハ御
 在り坐ざら可き由を合めて打出させ給へるありけ
 り漢籍礼記にも忠臣不事二君貞女不見兩夫と云ハ
然る事あるが其ハ唯教を垂たるのこなりけり
心よ深く深ても思えざるを此ハ實事ありて實は哀
ことも愛ありとも云い方なき御事ありり源氏夕
霧卷よ凡だた少一宜しく成ぬる人の人二人見る
例ハ心憂く淡つけ事あるを況て御身ハ然許少
縁子て人の近著き聞ゆ可き
 ○都麻波那斯ハ記傳よ
もも非ぬを云とも云り

此ハ夫者ハハ並あり古ハ夫婦互ひハ都麻と云一車ハ云
 七更あり都麻と云稱ハ今の俗言ハ都礼阿比と云ハ
 當りり 仁賢天皇六年御紀ハ吾大阿夫怜矣此云阿我圖
 摩播耶と有る是あり万葉ニ四丁 太后御歌ハ若草乃
 婦之念鳥三と有る婦ハ借字子て此ハ天智天皇を夫
 三甲奉とて給へるあり又三丁 獻泊瀬部皇女歌ハ玉
 藻成彼依此依靡相之婦乃命と有ハ其御夫河島皇子の
 御事よて婦字の説石の如ハ四丁 天皇之行幸乃
 隨意物部乃八十件伴雄與出去之愛夫者九十九ハ 若草
 之夫香有良武十三丁 其夫乃子我流珠乃年諸長思

第十四行小安宗正
良乃根衣は良吉
須氣安麻多阿
礼塔使是池指
流礼衣と有る者
の意は似たり

来之十三^{二十}子妾耳鴨君尔戀漁吾耳鴨夫君尔戀礼
薄ると此等即夫字を訓り倍初より此迄の意を想て
云ハゞ汝命こころい胃めて生とせば鳥之崎と磯之崎
何處よも何處よも遺る處無く妻を持つて御在す
の吾ハ女もまハ汝命を除て他ハ夫ハ一と云^{この}今
汝命の見棄て他用ハ往坐るハ吾ハ頼む方立とバ如
何為いと別を悲哀とて棲ハ往坐す事を思ハ止まり
給へと云意を此間ハ合のたり倍然留り給つと今よ
り睦ありよ夫婦の語りいと為としと云意を此より
下ハ述たるなり^神意ハ注さしたる實ハ然る説なり
右但

文は今よりハ性無く嫉妬為る事ハ為トと有る語を
省きて引らハ右九百六十二下ハ論へと^{如く外}よ
知有る事ハ○阿夜加岐能ハ^内寝の御帳
を云ふりり記傳ハ文垣之もて文とハ物の形畫キ
彩色あると為ると云ある可ハ又ハ綾も有べし垣ハ
帷帳あると云ある可ハ太神宮儀式帳ハ衣垣曳豆と
有も施を垣の如く引延へ隔るを云ると准るべし^し知
べし凡て加伎ハ内外を隔限る由の名あるハ何よて
も云べきなりと云きたるハ此大人あるか人の云出
りし説もて甚^奇なり考あるよ就て猶考らる履
仲天皇前御紀黒媛の裳ハ御在ハ坐ける所ハ乃入室

開帳居於玉床と見えたる帳 是あり欽明天皇二十
三年御紀大伴狹手彦連が高麗より還来とす所より以
て織帳奉獻於天皇と有て織帳張於高麗王内寢と見
えたるも共より内寢の具あり又孝德天皇大化二年御
紀より帷帳等用白布と云事有る帷を加多毘良帳を加
伊志呂と訓 たら即垣代の義よりして謂ゆる壁代の
事あり其垣代と壁代と同トキ由ハ右の儀式帳の衣
垣を長曆送官符より垣代生絹單帳壹條 長六尺 幅三幅 と見え
て此より垣代の稱有り然るを明應五年内宮臨時假殿
遷宮記より猶御宿垣と書し高宮假殿遷宮記より絹

垣串と云事有る此 渡ハ後御の御時御正体を屏奉る
具ありとも事ハ一あり即太神宮式より壁代絹帳三條
一條長六丈廣六幅 と有る即右に謂ゆる垣代の事あり
一條長九尺廣二幅
るを以て垣壁通ハ一云事を知べし即和名抄屏障具
ハ帷唐韻云幌 和名止 八利 帷幔也と有ハ戸張の義あり帳
凡帳 釋名云帳張也施張於床上也小帳曰才 俗云才帳 一云屏帳
今按帳屬有凡帳之名所出未詳と有る此より和名を載
すと雖も名義抄ふハ登婆理又加多毘良等の訓有り
然し其凡帳の事を類聚雜要抄より帷夏白生平絹以
白泥野薊秋草等畫之又次攝繪胡粉用之凡裏白粉張

也紐冬濃打又黒打夏生絹黒漆色也冬面額額三丈裏
三丈紐四丈五尺黒漆凡五幅長六尺幅別如巾紐付之
と有ゆ但絹垣と壁代と幔と凡帳と各其製後より異
るると雖も本は此阿夜加岐一ありけり事右よ云々
共を見て知べし楮此時ハ神代と云中より大い事の
問けたりし程より内寝の帷帳より己より縁色を全畫
て用いさせ各へり御事と見えたり出雲風土記秋鹿
郡惠曇御の文より須佐能乎命御子磐坂日子命国巡行
坐時至此處而詔此處者同推美好有国形如畫藪哉
と有を以て當昔己より物より畫く事の有りを曉る可し

阿夜ハ右の如く文ありと始として綾て其文理より因
と和名赤る和名抄錦綺類より綾野王曰綾似綺而細者
也和各阿夜綾有熟線綾長連綾二足綾花文綾平綾等
名考聲切韻云牧具越調小綾也と有て綾字より阿夜こ
云訓有を知べし又須理毘賣命の當昔己より絹と
よ紋を織て用いさせ各ふ許の事も必無しといふ云べ
るなり○布波夜賀斯多尔ハ含然之下よりあり記傳
よ俗言よ布波理とも布波布波とも云事あり此ハ床
の用よ帷帳あるの欄の布波理と掛りたり下よと云
らるると注とをたると信よ然り其布波理も云ハ含
ありたり状を云ふよて應神天皇十三年御紀大御歌
よ那伽菟能府保語茂利阿伽例蘆鳩等呼と有る府
保語茂利ハ含隱よて此ハ橘の答めると云て万葉十

四三十一 由豆流波乃布敷麻留登伎尔十八十六 佐
 具良波奈伊麻太敷布賣 利二十三十一 古乃豆加之
 波能保之麻例等ふと云ふ布之保之布波共之令す
 義ありけむ其念やりあり下す信之内寝の御帳
 の内を云ありけり 次あり古夜も古夜加こ
云すして加を省り是たるよ垂心
 て此も布波夜加こ宣いす ○年斯夫須麻ハ記傳よ
して同トく加の言を略たり
 然被よて暖あり由の祿ありと云はたり万葉四十三
 系被奈故也我下丹羅卧與妹不宿者肌之寒霜と一
 り偕此系被よハ尔古夜賀斯多尔と續け給い次あり
 栲被よハ佐夜具賀斯多尔と有て其ハ清くと快き状

ありを對見りよ此系ハ必和衣の方よて指を以て柔
 りりよ物為たる被を云と見えたり ○尔古夜賀斯多
 尔ハ記傳よ柔之下より尔古夜ハ尔古夜加ありと
 加を省りあり 取と云はたりか如し尔古の例ハ皇極
要
 天皇三年御紀歌よ武桐都鳥尔底屢割羅我尔古祿
 舉曾之有る尔古を通證よ柔根也と注せり万葉十一
 三十一 蘆垣之中之似兒草尔故余漢二十十四 尔故
 九十一 具佐能尔古餘可尔之母ると見え又右より引る 四十
 下あり奈胡也よ音通同意ある事よも更なる然は
 系被ハ和妙を以て制さる物ありり此よハ其柔嫩

多る由を宣へる事其物は就著一栲被ハ唯清栲被ハ唯清のそあふを
 能く其身よ副ふ物ある故一○多久夫須麻ハ栲被
 巫被と云ハ名ハ負けし一
 多る此事ハ傳十九三百あり己に注ろか此も云ハ
 出雲風土記用引文よ栲衾志羅紀乃三情一其に見え
 仲哀天皇八年御紀よ栲衾新羅国と有る此を播磨風
 土記よ白衾新羅国と作るハ栲ハ白き物あり故
 万葉十五十五よも多久夫須麻新羅邊伊麻須と有り
 又十四二十よ多久夫須麻之良夜麻可是能とも有て
 皆白と云へ係る發語あり冠辞考よ右等ハ歌を引
 すと續けたり栲ハ木綿あり故ハ集中よ志呂多問
 と云所よ白栲と書々も有り云くも注こまたり

○佐夜具賀斯多尔ハ清潔下之下ミタなる右の燕被よ柔
 かりる由を宣へる對よ此よハ其清く潔き事を賞
 て詠せ給へる多る記傳ハ諸説有か中ハ契沖ハ佐夜
 具ハ清潔き事なりと云ハ方甚諾るるよ就て其ハ因
 り其ハ白栲原官故大御歌ハ阿斯波良能志祁去岐
 哀夜屋須賀多美伊夜屋佐夜斯岐豆和賀布多理泥斯
 之有る四句の弥清敷而も此も同一天武天皇 二年御
 紀ハ潔身を美哀佐夜来氏と訓ハ是多る栲木綿ハ
 白く鮮やうみして肌ハ著く事ハ甚清爽ありけむ
 清潔とハ宣ハマツ可き御事あり一但記傳ハ
 佐夜

と佐夜めく下る可一源氏物語よ夜の音あり曾與
くくとあど有よ同じと云とたるも事ハ一よ歸めと
バ説の違へ
るよハ非す
○阿和申岐能以下九句ハ先ある沼河北
賣の歌命出たり此ハ己よ上九百四注るか奴如く沫
雪之めて弱フと云む發語あり和加夜流牟泥遠ハ弱ヤ
りある胸ハ曾陀多伎ハ徐叩ハよて抱合て胸と胸
とを打叩ハ後ハ多久巨怒能ハハ栲細之よて白
と云む發語あり斯路岐多陀牟岐ハ白腕あり曾陀多
岐と多岐ハ右の胸を打叩くる麻那賀理ハ栲
在よて腕と互子組貫よて此多岐麻那賀理の一句
よて上よ謂ゆる胸と腕と二と一よ受たり麻多麻傳

ハ眞玉子あり多麻傳佐斯麻岐ハ玉子差纏よて手を
差交して枕と爲り由あり毛ハ那賀尔ハ股長よてこ
足を伸て寛るりよ友寐を寫る狀あり但此ハ阿和
久巨怒能云ハ有る其沼河北賣命のよハ多久巨怒能
云ハ阿和由岐能云と句の前後ハ置替りたるの
めて受る所同ハりりハ○伊遠斯那世ハ沼河北賣
命のハ今逢奉るしと爲る所あるが故ハ伊波那佐牟
と云る事上九百五注るか如ハ此ハ己よ嫡后と定
めりて御在ハ坐て唯引留めて臥させ奉る事と聞
えさせ給ふ所あるが故ハ如此有る記傳ハ伊遠斯
那世ハ寐を宿よと云事あり斯ハ助辭ハ那世ハ前歌

の那佐牟と同言多々を此ハ麻よと云意あり故也世
こハ云るあり猪河夜加伎能云此迄ハ承く此田ハ
留より給いて今より吾と親よりハ可美ク麻給へと
其状を演たさるると云はたりか如ク○登與美岐ハ
記傳ハ豊御酒より朝倉宮段太后御歌ハ多加比加流
比能美古尔登余美伎多豆麻都良執五下葉六二十下將
還来日相飲酒曾此豊御酒者又二十焼刀之加度打放
大天之禱豊御酒尔吾醉尔家里十九四下下還事奏日
尔相飲酒曾斯豊御酒者ある有を思ふハ豊御酒ハ酒
を祝て云称ありと云はたり此豊ハ御酒の上よ添て
云のもあるす御食ふと

よも云事より推古天皇の大御名を豊御食炊屋姫天
皇ニ申奉りしハ豊御食ニ祝申す言の有を以る
○多豆麻都良世ハ記傳ハ献多り此献ハ飲給へ
と云意より胃神ハ自進め給ふ御言あり故契沖ハ間
食せと云るいと注せる能叶へり右ハ引る朝倉朝太
皇ハ御歌ハ多加比加流比能美古尔と有とバ人ハ仰
じ給ふと聞ゆ借飲給へと云事を麻草礼と云と同意
あり麻草流ハ佐の奉るをも自飲食ニシクヒハ給ふとも通
ハ云へハ献るも其如く通して自飲食ハ給ふと
も云めり續紀十五四下元正天皇より聖武天皇ハ奉
給へら大御歌ハ夜須美斯志和己於保支美波多比良

台石より其行取御酒
 杯を依指奉而飲目
 有御馬今案給
 上高き給時
 此此此歌
 為中後曲云云
 有云云御馬
 御酒宴の御
 御在坐上
 御前見
 那覽取理而
 暖一可云

氣久那何久伊未之氏等與美岐府都流こ有る此麻都
 流も献るよて飲給ると云意る中昔の物語書ふと
 よ衣服を貴人よ佐の著せ奉るをも奉ると云い又著
 て在事をも其を奉りあると云り諸今如此御酒を
 進め奉給ふハ今俗不謂ゆる中直の盃の意味よ似た
 り取と云きたるよて甚能通えたり 又其並よ河麻豆
 止乃登理母知且許能等與美岐遠伊未多且末都流こ
 有も天神御孫尊の取持て此豊御酒を今聞食すと悦
 ませ給へる意の大御歌るる鈴屋大人の解よ多豆末
 都流こハ聞食すと詔給へるよて天皇の今此豊御酒
 を取持して聞食すと詠給へるり中昔は貴人の御衣
 を著給へる事を其を奉ると常よ云とハ御酒を
 を聞食すと奉ると云云 ○宇伎由比ハ記傳よ其結よて
 云べきるるハ有り

今朝名宮段三車鉢
 歌の河理は奴能美
 幣能古賀佐と賀世
 流美巨多麻宇岐
 尔二有瑞玉盛と
 云事を今見らる

女神男神互よ御盃を差交して今より長よ御心變る
 一と結固給ふ御契を云る宇伎ハ盃を結と標結
 るどの結よて事を定め固むる謂るる世俗は謂ゆる
 納采の由比も此意るる今世迄も万事を契固むる表
 よハ盃を差交す事ハ神代よりの風儀るるけり
 こ有る是よて聞えたり 宇伎ハ猶景行天皇十八年御
 膳夫等遺盃故時人号其忘盃處曰浮羽今謂的者訛也
 昔筑紫俗号盃曰浮羽と有り但筑紫の俗言のこふ
 一の事ハ右の宇伎由比又美豆多麻宇岐ハ一ハ出雲
 一ハ大和よての事あるハ昔筑紫俗云ハ古傳よ非
 ずして撰者の加筆るる事著し又筑後凡土記も其
 事を載たると昔景行天皇巡回既畢還都之時膳司在
 此村忘御酒盃云々天皇勅曰惜哉朕之酒盃因曰宇伎
 波夜郡後入誤覽生葉郡と有る酒盃の下よ俗語云酒

蓋有^{宇和} ○宇那賀氣理^五ハ記傳子師説子互子項子
 手を懸て親しく並居を云と有り信よ然る可一但項
 子手を懸居ハ言の本の意よて必しも然る^俗親
 しく雙居を云り万葉十八^{三十一}多豆佐波利宇奈我
 既利為氏於母保之吉許登母加多良比那具左宇流許
 己呂波安良宇宇と有る上下ハ語よて其意知くとた
 りと云とたゞ寔よ然る説るる右の歌を以て考る子
 宇那賀氣理^五ハ神世七代章第九一書よ謂ゆ
 る男女^耦生之神と有る多具比ハ^{タケ}宇祖^ノの義なる
 ガ傳五^十子^十住^十カ如く孝徳天皇大化五年御紀歌

子陀虞毗預俱陀虞陸屢伊慕宇と有ハ副能副在妹子
 と云事よて其も此項懸ハ同トく又右の多豆佐波利
 も万葉二^{三十一}子^十敷妙之袖攜鏡成雖見不厭又^{三十一}取^十
 持而吾二人見之又攜子吾二見之四^{五十一}子^十吾妹兒與
 携行而副而將座九^{十八}子^十攜二人入居而又^{三十一}携^十遊
 磯麻るど有て多く男女夫婦の事よ云るハ必しも子
 子手と携方ふ事ありと云と其相親ありあり由を
 以云よて宇那賀氣理と云も項よ男女の子と子を懸
 合ふ事ある也此と相放してハ見べりさるあり^但
 那賀氣理とのと云ても子を懸て物為る事あり^宇
 多豆佐波利と續け云時ハ重復し^カ如くあると云も

同ト事あり又右の多具布も夫婦相副ふ事云ふ
こと非^らざる語の本ハ 予組あがり何時も予を組合ての
か如し ○至今鎮坐也ハ上ノ所見たる御父大神の
其夫神へ仰給へり御言よ意礼爲大因主神爲宇都志
国玉神而其我之女須世理毘賣爲嫡妻而於宇迦能山
之山本於衣津石根宮柱布乃斯理於高天原冰椽多逃
斯理而居是奴也こ有る其御事の結あり諸大因主神
の宮ハトモ傳サ三^ニ百七^トハ注^ルガ如ク其始須賀宮
よて長^クセ給へるを彼八十神の事故よ依て御父大
神の御許よ御在^シ坐^ケル右の御命を蒙ふり坐て
出雲国よ還^ルて御在^シ坐^テ其八十神と^シ坂之御

尾^ノ追伏^セ河瀬毎^ニ追接い^テ始て国作^ルて御在^シ
坐^スと爲て其后神と相共^ニ住^セ御在^シ坐^ス宮と其
宇迦山本宮^ニを構^ルセ給ひ其大造の功績を^シ得
建^タセ給ふ内^ニ此事の御在^シ坐^ル己^ノ后神^ニ隔離
りて住^ハひと爲^サセ給いけ^ル今將此蓋^レ結^テの御事
よ依て元の如く相副ひ予撫^サソリて項懸^リ鎮^リ御
在^シ坐^テ今よ至^ル迄^ニ替^ルセ給^フざる由あり其後天
神御子よ此国土を避奉^ルて給ひ^シり^テ八百丹杵築
宮を常宮と定め^サセ給ひて其宮處ハ^リ成^ルこと
も古の狀^ニ相異^ルる^ル由あり神名式よ出雲国出

皇紀三十五年御記
 一云天皇以孫姬命
 爲御枝（皇孫命於天
 照大神是以此姬命
 以天照大神鎮坐於
 磯城最權之本而祠
 之）有以此方より留奉
 此方より外宮儀
 式惟なる皇太神の
 御詔より高天原
 皇孫命林坂賜座
 有八岐方より其留
 奉了由と詔給へり

雲郡杵築大社名神大同社大神大正神社風土記より御
 向社と有る即御嫡妻社と申奉る御事之此と謂ゆ
 る宇那賀氣理互至今鎮坐也と有る是より鎮坐ハ記
 傳ハ是を常ハ某神某處ハ鎮坐と云馴て唯其處ハ坐
 ず事との心得るハ委りず鎮坐ハ他處ハ遷往坐
 ずて其處ハ留リ給ふ意ハ云言る然也ハ今此大神
 ハ倭国ハ往坐むと爲一を思一止りて何處より往坐
 ず出雲国ハ留リ住給ふと云り出雲風土記ハ意宇郡
 母理郡中但ハ雲立出雲国者我靜坐国青垣山廻賜而
 玉珍置賜而守詔と有る日代官段倭建命萌坐て八尋

白智鳥鳥ハ化て飛翔行て河内の志哉ハ留給ふ所ハ故
 於其地作御陵鎮坐也ハ有る留奉り一意なる遷却崇
 神詞ハ山川乃廣久清地ハ遷出坐互神奈我良鎮坐世
 絲辭竟奉と有る永て其處ハ坐て他ハ出還給ふると
 云意なる出雲神賀詞ハ大穴持命の申給久皇御孫命
 乃靜坐年大倭国申天云ハ皇孫命能近守神登貢置天
 八百丹杵築官本靜坐支見え万葉二三十高市皇子
 命を葬奉り一事を朝毛吉木上官等常官等定奉而神
 隨安定座奴と有る其處ハ留り坐す意なる所以ハ
 崇神天皇十年御紀ハ鎮坐の二字を須宇と訓たり

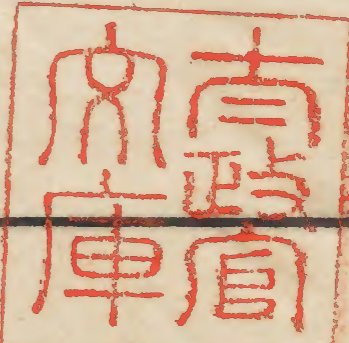
提要と所見たるが如し又記傳は志豆麻理と登村麻
神八座の中の玉留魂神ハ玉積産靈神とし作て魂を
鎮しる意の御名多し多麻都米年須畏と訓へき
り又祝詞は高天原ハ神留坐と有るも續紀詔ハ神
積坐と作らば相照して此留坐積坐共都麻理と
訓べし皆都麻理ハ留住の意あり故に留字を書る
リ此ハ皇御孫命の此国ハ降給ふ對へて天神の降
坐すて天子留坐す由り也鎮坐と云へて通へり
葉五ノ宇奈原能邊ル母奧ル母神豆麻利宇志播吉伊
麻須諸能大御神等云々此神豆麻利也○神語ハ記傳
右の鎮坐を云ふこと注さるなり
又迦牟基登と訓れたり但此ハ神命の意ありと神語
ありと二の差別有り其神命の義ありハ傳七七十ノ
例を擧げたるが如く古事記国生段ノ於是ニ神云ハ猶
宣白天神之御所即共參上請天神之命と見え崇神天

皇七年御紀ハ天皇乃幸于神淺茅原而會八十萬神以
卜問之是時神明憑倭迹ニ日百襲姬命曰云々天皇問
曰教如此者誰神也答曰云々時神語隨教祭祀と有り
又前志比宮段ハ建内宿祢大臣居於沙庭請神之命於
是太后歸神言教覺詔者云々亦建内宿祢居於沙庭請
神之命於是教覺之状如先日云々有る神之命を其
八年御紀ハ天皇聞神言云々神功皇后元年御紀ハ
神教とも有り又諸神の御託言を請奉らせ給へる
所ハ時得神語隨教而祭と見え欽明天皇十六年御紀
ハ於是天皇命神祇伯敬受策於神祇祝者廻託神語報

八万葉十九年... 伊都之祝之神言... 伊都早也... 是也...
持統天皇... 神紀... 正月戊寅... 中臣大島朝臣... 天神壽詞... 是也...
是也...
是也...

曰云々又皇極天皇三年御紀は是月用内巫覡等折取
折取枝葉懸掛木綿洞大臣度橋之時爭陳神語入微之
説とも巫覡等遂詐託於神語曰奈常世神者貧人致富
老人還少とも有る類の神語を續紀の神教とし神
命とし作る是多かり神の御託言又ハ御トを以て聞
奉る神の御教言を云り又ハ此の神語の類もて神
世の故事の類を云る其ハ天智天皇十年御紀ハ春
正月己亥朔癸卯大錦上中臣金連命宣神事ハ有るを記
傳ハ是ハ神語の意ありと云とたりハ然る言もて神
祇令凡踐祚之日中臣奏天神之壽詞の義辭ハ謂以神

代之古事為萬壽之室詞也ハ有る是を謂るハ又續紀
ハ神護景雲元年二月甲午幸東院出雲国造外從五位
下出雲臣益方奏神事云々同日二年二月庚辰出雲国造
外從五位下出雲臣益方奏神事云々と有る常ハ奏
神齋賀事とし奏神賀事とも有る此ニハ限りて奏神
事ハ奏神語云々ハ等しくして謂ゆる神賀詞の事を
云るなり同三年六月乙卯詔曰因神語有言大中臣而中
臣朝臣清麻呂兩度任神祇官供奉無失是以賜姓大中
臣朝臣ニ有る神語ハ即大祓詞ありて此事ハ其詞ハ
許ハ太久乃罪出武如此出天津宮事以氏大中臣



天津金木^字本打切末打断^氏云々天津祝詞乃太祝詞
 事^字宣礼之有る此詞を神語と語^詔爲給へるあり其外
 大嘗祭儀及踐祚大嘗祭式等も雜畧者神語曰由加
 物又神語所謂八開字是也と有るを神代の古語を
 差て神語といふり其ハ仁明天皇御紀嘉祥二年四十
 宝算を奉賀る長歌^{上流}事之詞波此国乃本詞^云
 逐倚^{天唐乃}詞遠不假^須書記^須博士不雇^須此国^乃云
 傳^{布良}日本^乃倭之田^波言玉^乃當田^{古語}流来^留
 神語^尔傳來^留事任^尔本世^乃事尋者歌語^尔詠反
 志^天神事^尔用来^留皇事^尔用来^利本^乃世^尔依^傳云々

